

神戸市東灘区

魚崎中町遺跡

(第3次調査)

1996

神戸市教育委員会

神戸市東灘区

魚崎中町遺跡

(第3次調査)

1996

神戸市教育委員会

序

平成7年1月の兵庫県南部地震は、各地に大きな被害をもたらしました。神戸市では、一日もはやく安心して住めるまちを再建できるよう復旧・復興事業に精一杯努めています。

震災にともなう被害は、私たちの生活にとどまらず、足下に眠る多くの埋蔵文化財にも及びました。神戸市では、復旧・復興事業を進めるとともに、将来の文化的な発展にも目を向けていかなければならぬと考えています。被災した文化財の保護はそのひとつであるといえましょう。しかし、復旧・復興事業を円滑に進めるためには神戸市の被害はあまりにも大きいものです。

幸いにも、兵庫県には、復旧・復興事業の円滑な運営と膨大な量の発掘調査を支援するため、平成7年度より全国の自治体から多数の専門職員が派遣され、慣れない土地にもかかわらず日々復興のためご協力いただいています。

本書でご報告する魚崎中町遺跡も住宅供給にともなう調査で、兵庫県への派遣職員の支援を受けて実施することができたものです。

これまで、東灘区の歴史的発展の足跡は明確ではありませんでしたが、今回の発掘調査によって古墳時代初頭の墓跡や奈良時代の水田跡がみつかり、貴重な資料となりました。

これらの成果をまとめた本書が、復興の足跡の記録として、また学術研究、教育・普及の資料として広く活用され、復興事業・埋蔵文化財保護へのご理解を深めていただく機会となれば幸いです。

最後になりましたが、調査ならびに本書の刊行にご協力いただいた兵庫県教育委員会、同埋蔵文化財調査事務所、ならびに関係各位に深く感謝いたします。

平成9年3月31日

神戸市教育委員会

教育長 鞍 本 昌 男

例　　言

1. 本書は、兵庫県神戸市東灘区魚崎中町2丁目567-1、2他に所在する魚崎中町遺跡（第3次調査）の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号はUZN-3である。
3. 発掘調査は阪神・淡路人震災の復興事業にともなう事前調査であり、神戸市教育委員会が実施した。
4. 発掘調査は、先行調査を平成8年4月23日から平成8年4月27日まで、本調査を平成8年5月13日から平成8年6月28日まで実施した。先行調査は神戸市教育委員会 学芸員須藤宏が、本調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査第1班 調査専門員石田彰紀、主任岩田明広が担当した。整理作業は期間を設けなかったが、発掘調査と平行し、平成8年5月22日から平成8年7月14日まで主に発掘調査現場事務所において実施し、石田・岩田が担当した。発掘調査の組織はI-3に示した。
5. 出土品の実測・作図・観察表は主に岩田が行ったが、一部を須藤が担当した。また、遺構および遺物のトレーについても岩田・石田・磯辺敦子が行った。
6. 発掘調査時の写真撮影は石田・岩田が行い、遺物の写真撮影は楠木真紀子氏に委託した。
7. 遺跡の基準点測量は（株）国際航業に委託した。
8. 土壌の分析は（株）パレオ・ラボに委託した。
9. 本書の執筆はI-1. 調査に至るまでの経過、II. 立地と環境を須藤が、それ以外を岩田が担当した。
10. 本書の編集は、石田の監修の下、岩田が行った。
11. 本書に掲載した資料は、平成8年度以降神戸市教育委員会が管理・保管する。
12. 本書の作成にあたり、下記の方々からご教示、ご協力を賜った。（敬称略）
　　浅岡俊夫、山本三郎、兵庫県教育委員会
　　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興1・2班

凡　　例

1. 図中の座標は、国家標準直角座標第V系に基づく座標値を示す。方位は、すべて座標北を示す。
2. 調査範囲には、国家標準直角座標第V系に基づき4mグリッドを設定した。グリッドの名称は、北西杭の番号を用いた。
3. 図の縮尺は、下記を基準とした。

遺構全測図1/200、遺構図1/80・1/30、土器・木製品実測図1/4、金属製品実測図1/2

なお、例外は挿図中に示した。

4. 全測図等に示す遺構表記の略号は、下のとおりである。

SX：周溝墓、SN：水田跡、SK：土壤・土坑・壺棺墓等

P：ピット

5. 遺構図中に示した遺物の番号は、遺物実測図の番号と一致する。

6. 土器実測図における断面黒塗りは須恵器を示す。

7. 観察表の表記は以下によっている。

法量の単位はcmで、()内の値は推定値である。

色調は、新版標準土色帳（農林省水産技術会議事務局監修1967）に準じて細別した。

残存率は残存部位の百分率で示した。

胎土の含有砂質物は、次の記号を用いて表記した。

S：砂粒、K：角閃石、U：白雲母、BU：黒雲母、SE：石英、T：長石、R：礫

焼成については、非常によいものをA、よいものをB、やや粗悪なものをC、不良なものをDとする4段階表記とした。

本文目次

例　　言	III. 遺跡の概観	11
凡　　例	IV. 遺構と遺物	13
目　　次	1. 第1遺構面の遺構と遺物	13
I. 発掘調査の概要	2. 第2遺構面の遺構と遺物	16
1. 調査に至るまでの経過	3. 第3遺構面の遺構と遺物	22
2. 発掘調査・報告書作成の経過	V. 結語	36
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	付編、自然科学的分析	37
II. 遺跡の立地と環境		

表　　目　　次

第1表 水田跡	17	第3表 資料1 g 当りのプラント・オパール個数	38
第2表 水田跡とその他の出土遺物観察表	21		

挿　　図　　目　　次

第1図 東灘周辺の地形	5	第16図 第2号周溝墓	26
第2図 遺跡周辺の旧地形	7	第17図 第2号周溝墓出土遺物	27
第3図 周辺遺跡分布図	9	第18図 第3号周溝墓	28
第4図 位置図	10	第19図 第3号周溝墓出土遺物	29
第5図 基本層序	12	第20図 第1号・第2号土壙	31
第6図 第1遺構面全測図	13	第21図 第2号土坑出土遺物	31
第7図 耕作痕	14	第22図 第3号土壙	32
第8図 第2・3遺構面全測図	15	第23図 第3号土壙出土遺物	33
第9図 水田跡断面図	17	第24図 ピット	35
第10図 北側部分出土水田跡	18	第25図 試料採取地点付近の土層断面図と試料採 取層準	37
第11図 南側部分出土水田跡	19	第26図 SN13断面のプラント・オパール分布図	38
第12図 水田下面の状況	20	第27図 東断面のプラント・オパール分布図	39
第13図 水田跡とその他の出土遺物	20		
第14図 第1号周溝墓	24		
第15図 第1号周溝墓出土遺物	25		

図版目次

図版 1	先行調査範囲（第 2 遺構面）	図版 6	第 1 号周溝墓
	南側部分耕作痕		第 1 号周溝墓遺物出土状況
	北側部分耕作痕		第 2 号周溝墓
図版 2	南側部分水田跡	図版 7	第 3 号周溝墓
	北側部分水田跡		第 3 号周溝墓遺物出土状況
	調査風景		発掘調査参加者
図版 3	南側第 3 遺構面	図版 8	SX 1-1
	北側第 3 遺構面		SX 1-3
	六甲山と遺跡		SK 2-2
図版 4	第 2 号土坑		SK 2-3
	第 3 号土壤確認状況		SK 3-1
	第 3 号土壤内部		SX 3-1
図版 5	第 3 号土壤掘り方確認状況		水田跡6
	第 3 号土壤外部	図版 9	魚崎中町遺跡のプラント・オバール
	第 3 号土壤完掘状況	図版10	魚崎中町遺跡のプラント・オバール

I. 発掘調査の概要

1. 調査に至るまでの経過

阪神大震災により自宅が損壊し、住まいを失った方々の世帯数は市内だけでも20万に達し、震災から2年2ヶ月がたとうとしている現在でも仮設住宅に仮住まいされている、あるいは市外・県外にまでやもなく住居を移されている方々は多数にのぼっている。

現在も不便を強いられている方が住み慣れたわがまち神戸にもどってこられるためにも新たな住宅の確保が急務となっており、民間・公共の共同住宅建設が数多く行われている。今回の発掘調査はこのような震災復興のための共同住宅建設に先立って行われたものである。

平成8年3月11日、今回の住宅建設にともなう開発行為事前審査願が当教育委員会に提出された。計画地は魚崎中町遺跡として知られる遺跡の範囲内にあたるため、平成8年4月11日に試掘調査を実施した。試掘調査では2ヶ所設定した試掘坑において、歴史時代の遺物を含む洪积砂層、弥生時代の遺物包含層および溝状造構が検出され、当該地に遺跡の存在することが確認された。

この調査結果に基づき、共同住宅の建設工事にともなって遺跡の破壊される部分について発掘調査を行うこととなった。

発掘調査は平成8年4月23日から平成8年4月27日まで西側の隣地と接する部分についてトレンチ調査を神戸市教育委員会職員が行い、その他の分については平成8年5月13日から平成8年6月28日まで広島市教育委員会・埼玉県教育委員会から兵庫県教育委員会へ復興調査のため派遣された職員がこれを行った。

2. 発掘調査・報告書作成の経過

魚崎中町遺跡第3次調査は、平成8年4月23日から平成8年4月27日まで先行調査を行い、平成8年5月13日から平成8年6月28日まで本調査を実施した。発掘対象面積は、先行調査約133m²、本調査約391m²であった。先行調査は主に平盤測量をもって対応し、本調査時に4mを基準としたグリッドを設定した。北から南にAからJまで、西から東に1から8までである。グリッドの名称は、これらを組み合わせた北西杭の番号とした。

なお、廃土の場内処理にともない反転調査を実施したため、調査範囲を便宜上北側部分と南側部分に分けて記述する場合がある。経過の詳細については、下に調査日誌の記述を掲げるので、これに代えたい。

- 4月23日 先行調査を開始した。重機による掘削作業を開始した。表土下60cmの深さから遺構面が発見されたため、第1遺構面と呼称し表土掘削を行った。その結果円形周溝墓・壺棺などを確認した。
- 4月24日 全景写真撮影、平面図作成を行う。
- 4月25日 SX 1下層の調査を行う。
- 4月26日 周溝墓等の調査を終了し、さらに精査を行ったところ、第1遺構面下5cm程度の深さから異なる遺構面が発見されたため、表土掘削を行った。土坑1基が確認された。
- 4月27日 SK 2の調査を終え、埋戻しを行う。先行調査におけるすべての作業を終了した。
- 5月13日 本調査を開始した。廃土を場内処理するため、南北に調査区を区切り、反転調査を行うことに決定した。重機により建物基礎等の産業廃棄物の場外搬出を行った。現場事務所の設置および発掘器材を搬入した。
- 5月14日 南側部分について重機による第1遺構面までの表土掘削を開始した。その結果、壺棺1基を確認した。
- 5月15日 引き続き表土掘削を行い、耕作痕、畦畔跡を検出した。
- 5月16日 引き続き表土掘削を行い、先行調査で検出したSX 1延長を検出した。
- 5月17日 調査区西側から遺構の調査を進めた。
- 5月20日 当日より、遺構が掘り上がった順に測量・写真撮影を開始した。
- 5月21日 SX 1の測量を行った。
- 5月22日 SX 1の性格を把握するため、調査範囲の拡張を開始した。
- 5月23日 第2遺構面への掘り下げを行った。その結果、先に検出した畦畔にともなう水田跡が検出されたほか、第3遺構面で弥生時代の土器等を確認した。
- 5月24日 SK 3の調査を行った。
- 5月27日 水田跡の撮影を行い、水田跡部分の第3遺構面への掘り下げを行った。事務所の電気工事が完了した。
- 5月28日 基準点測定後、各遺構の測量を行い、第3遺構面の調査をほぼ終了。南側調査区の埋め戻し、および北側調査区の表土除去を開始した。
- 5月29日 基準点の標高取り付けが終了した。引き続き反転表土掘削を行った。

- 5月30日 SX 1・SK 3の調査を終了し、南側部分の調査をすべて終了した。引き続き反転表土掘削を行ったが、地中深く廃棄されていた産業廃棄物によって表土除去は難航した。
- 6月3日 引き続き北側部分の表土掘削を行った。その結果、第1遺構面全面に耕作痕を検出した。
- 6月4日 第1遺構面の撮影を実施した。
- 6月5日 北側部分の基準点測定が終了。第1遺構面の耕作痕の測量を行った。
- 6月6日 耕作痕の調査を終了した。
- 6月10日 第2遺構面への掘り下げを開始した。その結果、水田跡を検出した。
- 6月11日 夜間の降雨による冠水のため、排水作業に追われる。水田跡の調査を完了し第3遺構面への掘り下げを行う。その結果、調査区西側部分でSX 2、SX 3を検出、調査を開始した。
- 6月12日 引き続きSX 2、SX 3の調査を行う。
- 6月13日 第3遺構面SX 2上層で炭化した木片を検出した。
- 6月14日 SX 2、SX 3間の重複関係を確認した。SX 3下層で土器を検出した。
- 6月17日 SX 3の調査を終了した。引き続きSX 2の調査を行う。
- 6月18日 梅雨前線の活動が活発化し、現場が冠水した。
- 6月19日 SX 2の撮影・測量を完了した。
- 6月20日 第3遺構面の全景を撮影した。
- 6月21日 水田跡の土壤サンプリングを行い、プラントオパール分析を委託した。重機による下層への掘り下げを行い、下層に埋蔵文化財が存在しないことを確認した。これをもって、調査を終了した。
- 6月24日 北側部分の埋め戻しを開始した。
- 6月25日 引き続き埋め戻しを行った。
- 6月26日 埋め戻しを完了し、現場内の点検作業を行った。
- 6月27日 図面整理を行った。
- 6月28日 神戸市・県教育委員会・施工業者・地主らと協議を行い、調査現場を引き渡した。器材を撤収し、すべての作業を終了した。
- 整理および報告書の刊行作業は、現場作業と平行して、主に現場事務所内で行なった。期間は、平成8年5月22日から平成8年7月14日までである。
- 5月22日 出土遺物の水洗い・注記・復元作業、図面整理を開始した。
- 6月21日 図面のトレース・版組み、土器の実測およびトレースを開始した。
- 7月3日 原稿執筆、割りつけ・編集作業を開始した。
- 9月20日 遺物写真の撮影を行った。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

(1) 先行発掘調査

神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部会）

榎上 重光 神戸女子短期大学教授

和田 晴吾 立命館大学文学部教授

神戸市教育委員会

教育長 鞍本 昌男

社会教育部長 矢野 栄一郎

文化財課長 杉田 年章

社会教育部主幹 奥田 哲通

埋蔵文化財係長 渡辺 伸行

事務担当学芸員 松林 宏典

調査担当学芸員 須藤 宏

(2) 本調査・整理・報告書作成作業

神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部会）

榎上 重光 神戸女子短期大学教授

和田 晴吾 立命館大学文学部教授

神戸市教育委員会

教育長 鞍本 昌男

社会教育部長 矢野 栄一郎

文化財課長 杉田 年章

社会教育部主幹 奥田 哲通

埋蔵文化財係長 渡辺 伸行

事務担当学芸員 松林 宏典

調査担当者

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査専門員 石田 彰紀（広島市教育委員会派遣職員）

主任 岩田 明広（埼玉県教育委員会派遣職員）

II. 遺跡の立地と環境

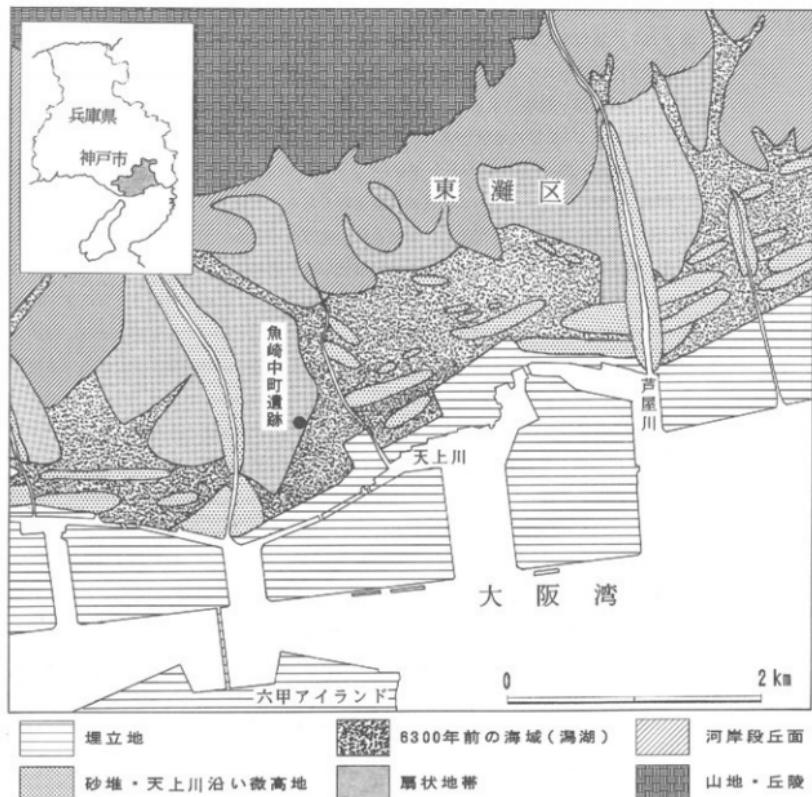
遺跡の位置

魚崎中町遺跡は神戸市東部の平野部に位置する。現在市街地のひろがるこの地は北に六甲山系がせまり、近代以降の埋め立てが行われる前は、山裾から海岸までの南北幅が2kmにも満たなかった傾斜のきつい平野である。本遺跡が立地するのは、住吉川左岸の扇状地帯微高地の東端付近にある。

周辺の遺跡

神戸市東部の灘区・東灘区は古くから市街地化がすすみ、遺跡の分布などにも不明な部分が多くたったが、再開発とともに発掘調査が昭和50年代以降から行われるようになったことによって、最近はその様相がかなり明らかになってきている。

六甲山南麓の土地構造は大きく3つに分けることができる。六甲山塊は深層風化した花崗岩、丘陵部および山よりの平野部は半固結状態の堆積物（大阪層群）、海よりの平野部



第1図 東灘周辺の地形（高橋学「神戸の土地の歴史」をもとに作成）

は洪水等によって形成された風化した花崗岩を母体とする未固結の堆積物が土地の基盤層となっている。そして後二者の境界は現在の国道2号線にはほかさなるように続いていることが明らかになっている。すなわち国道2号線以北では比較的堅密な基盤層が遺跡ののる面となるが、2号線以南では六甲山系をかたちづくる花崗岩の風化した砂(真砂土)が厚く堆積し、この上に遺跡がのる。

本山遺跡(第3図3、以下同様)第12次調査においてはおよそ6400年前がピークであったと考えられている縄文海進の際に形成された波食崖が確認され、その北は大阪層群の固い基盤層、南では真砂土が遺跡ののる基盤層となっている。この調査ではこの崖下、真砂土の下層から、縄文土器・石器が出土している。縄文時代に波食崖があり、その後、数十度の、あるいは数百度にも及ぶ回数の洪水によって運ばれた砂の堆積によって海が埋め立てられ、真砂土の陸地が形成される。この真砂土上面で縄文時代晩期以降の遺構・遺物が確認されている。

先土器時代 縄文時代

先土器時代から縄文時代中期までの遺跡は、遺物が主として丘陵部においていくつか確認されている程度である。遺構は西岡本遺跡(4)で縄文時代早期の平面円形プランをもつ住居址の確認されているのが唯一である。

縄文時代後期・晩期に入ると、本山遺跡(19)・井戸田遺跡(25)・森北町遺跡(23)・北青木遺跡(27)などの遺跡があり、平野部においても遺跡が散見されるようになる。本庄町遺跡(35)では後期のドングリ(イチイガシが主)ピットが確認されている。晩期の遺跡のなかで注目されるのが灘区の篠原遺跡である。丘陵上のこの遺跡からは大洞系の注口土器・遮光器土偶等が出土し、当地と東北地方との交流を示すものとして注目される。

弥生時代

縄文海進以降の真砂土の堆積によって陸地化した平野部において、人々の営みが確認できるようになるのは縄文時代晩期・弥生時代早期のこと、このころにまでにはすでに真砂土でできた不安定な陸地も人々が居住できる程度に安定していたことがわかる。河川沿いの自然堤防上、または海岸沿いの砂堆上にこれらの初期の農耕集落が営まれる(本庄町遺跡〔35〕・北青木遺跡〔27〕)。

弥生時代中期以降は、平野部といわず、丘陵上ないし山腹にもかなりの数の集落が営まれるようになる。伯母野山遺跡・赤塚山遺跡(2)・荒神山遺跡(3)・保久良神社遺跡(14)・金鳥山遺跡(11)・森奥遺跡(13)・東山遺跡(12)・会下山遺跡(20)・城山遺跡(30)などが、いわゆる高地性集落としてあらわれる。これらの多くが後期まで継続する。丘陵上の集落として森北町遺跡(23)が、平野部の集落は郡家遺跡(6)・住吉宮町遺跡(7)・本山遺跡(19)・本庄町遺跡(35)・深江北町遺跡(36)などがある。これらの集落遺跡は中期あるいは後期に村が拓かれるに以降は長く継続する。

六甲山麓は弥生時代の青銅器が多く出土することで知られる。灘区の桜ヶ丘遺跡で銅鐸12口・銅戈7本が出土しているが、そのほかにも満ヶ森遺跡・本山遺跡(19)・生駒遺跡(37)・森遺跡(21)などで銅鐸・保久良神社遺跡(14)で大阪湾形銅戈・森北町遺跡(23)で前漢鏡片・銅鏡が出土している。

弥生時代の墓制のひとつである周溝墓は、郡家遺跡(6)・住吉宮町遺跡(7)・深江北町遺跡(36)などで確認されている。周溝墓には方形に溝をめぐらすものと円形に溝をめ

第2図 遊説周辺の地形（明治18年大日本帝国參謀本部陸軍部測量局測量）



ぐらすものがあり、墓の形が対称を示す。郡家遺跡では円形周溝墓と方形周溝墓とが存在するが、地点を違えており、両者が共存するかどうかは分からぬ。住吉宮町遺跡では方形周溝墓が、深江北町遺跡では円形周溝墓が群在している。

古墳時代

古墳時代前期の古墳は、海岸沿いに西求女塚古墳（墳長約95m）・処女塚古墳（墳長68m）・東求女塚古墳（8、墳長約80m）、丘陵部に扁保曾塚古墳（18、墳長約60m）、芦屋市の阿保親王塚古墳（墳径約32m）が現在知られている。阿保親王塚古墳は円墳とされている。東求女塚古墳は前方後円墳とされているが、後円部は発掘調査されていないので、前方後方墳である可能性もある。扁保曾塚古墳は前方後円墳である。西求女塚古墳・処女塚古墳の二古墳は、瀬戸内海に面しているにもかかわらず山陰系の土器が供獻され、前方後方という墳形をもつことに興味がもたれる。

中期古墳は、住吉宮町古墳群に中期中葉の方墳や、中期末の帆立貝式古墳である住吉東古墳（墳長24m）が確認されている。芦屋市域には中期後半の帆立貝式古墳である金津山古墳（墳長55m）・中期末の方墳である打出小槌古墳（一辺約35m）などがある。

古墳時代後期から形成される群集墳は平野部に面する丘陵部に数多く存在する。郡家遺跡（6）のシスト群、横穴式石室をもつ鴨子ケ原古墳群・西岡本の野寄古墳群（4）、岡本海林古墳（16）・八幡谷古墳（15）・生駒古墳（37）・城山三条古墳群（30）・八十塚古墳群など多数がある。

なお、住吉宮町遺跡周辺には墳墓が集中して存在することが注目される。住吉宮町古墳群は洪水砂に埋没していた墳墓群で、弥生時代末の方形周溝墓と古墳時代中期から後期にかけての方墳・前方後円墳、さらに墳丘をもたないシスト、壺棺などが群在している。これまでに30基以上が確認されているが、方形周溝墓と方墳はともに低い盛土をもつ一辺5～10m程度のもので、形態からは区別がつかない。しかも両者に切り合い関係はなく、古墳築造時にも方形周溝墓がそれとして認識されているようである。弥生時代末ないし古墳時代初頭から古墳時代後期、300年にわたる長期にわたって喪葬の地としてこの地域が意識されていたのか興味がもたれる。

また、この地域をやや広くみると、南に前期古墳の東求女塚古墳があり、江戸時代の絵図には坊ヶ塚・梅ノ木塚・平塚・鬼塚などという地名がみられる。坊ヶ塚は前方後円形にもみえるかたちで描かれている。この付近における洪水砂の堆積がどの程度であったか必ずしも明らかではないが、より大規模な墳丘をもつ古墳が存在していただろうことを推定しうる。住吉川右岸の自然堤防上が古墳時代全般にわたって墓域として利用されていたと考えられる。

奈良時代

律令期に入り、この地域は摂津国菟原郡に属するようになる。菟原郡は現在の芦屋市から神戸市中央区の生田川付近までを郡域とするが、東灘区御影町の郡家遺跡（6）が菟原郡衙の所在地と推定される。明らかに官衙と認められる遺構はいまのところ確認されていないが、この遺跡周辺には郡家や大蔵といった地名が残っている。

参考文献

- 浅岡俊夫・古川久雄 1995『神戸市東灘区郡家遺跡一塚坪地区第10次調査』六甲山麓遺跡調査会
岡田章一・渡辺昇 1990『坊ヶ塚遺跡（住吉宮町遺跡群II）』兵庫県教委



1 魚崎中町遺跡	2 赤塚山遺跡	3 荒神山遺跡	4 西岡本遺跡	5 岡本北遺跡	6 郡家遺跡	7 住吉宮町遺跡
8 東求女塚古墳	9 岡本遺跡	10 甲南町遺跡	11 金鳥山遺跡	12 東山遺跡	13 森奥遺跡	14 保久良神社遺跡
15 八幡谷古墳	16 岡本梅林古墳	17 本山北遺跡	18 畠曾塚	19 本山遺跡	20 会下山遺跡	21 森御釋出土地
22 坂下山遺跡	23 森北町遺跡	24 出口遺跡	25 井戸田遺跡	26 本山中野遺跡	27 北青木遺跡	28 鷹尾城跡
29 山芦屋遺跡	30 城山・三条古墳群	31 三条九ノ坪遺跡	32 三条岡山遺跡	33 寺田遺跡	34 清知遺跡	
35 木庄村遺跡	36 漢江北町遺跡	37 生駒御跡出土地				

第3図 周辺遺跡分布図



第4図 位置図

岡田章一・別府洋二・中川 沙 1991『本庄村道跡』兵庫県教委

神戸市教育委員会 1990『本山道跡第12次調査の概要』

高橋 学 1986「芦屋川・住吉川流域の地形環境Ⅰ」兵庫県教委『北青木道路』所収

高橋 学 1987「芦屋川・住吉川流域の地形環境Ⅱ」兵庫県教委『小路大町道跡』所収

高橋 学 1988「芦屋川・住吉川流域の地形環境Ⅲ」兵庫県教委『深江北町道跡』所収

高橋 学 1990a「VI. 坊ヶ塚遺跡の地形環境分析」兵庫県教委『坊ヶ塚遺跡(住吉宮町遺跡群Ⅱ)』所収

高橋 学 1990b「郡家道路-御影中学校地区の地形環境」神戸市教委『郡家道路 神戸市東灘区所在御影中町地区第3次調査概報告』所収

高橋 学 1991「第5節 六甲山南麓の地形環境分析-本庄村道跡・西岡本1丁目道跡の地形環境-」兵庫県教委『本庄村道跡』所収

III. 遺跡の概観

魚崎中町遺跡は、六甲山から南流する住吉川が形成する扇状地末端付近に位置する。付近は、かつての海域と海性堆積物による砂堆、扇状地性堆積物が複雑に入り組む地域と考えられる。

今回調査範囲となった部分は遺跡中心部より南東によった地点にあり、南方に緩やかに傾斜する。現況の標高は2.5~2.8mである。

調査範囲は南側が阪神・淡路大震災によって倒壊した建物基礎によって、また北側が駐車場上屋の基礎および駐車場建設以前の盛土・産業廃棄物の投棄によって激しく搅乱されていた。

遺構面はこれらの搅乱層によって相当部分が破壊されていると予想されたが、搅乱層下の近世あるいは近代の水田層（I・II層）、および平安時代から中世にかけての層厚80cm程度の洪水砂（III層）によって予想以上に保存されていた。遺構面は、表土下50cm程度に平安時代前期頃の第1遺構面（V層）、表土下60cmに古墳時代末から奈良時代前半の第2遺構面（VI層）、表土下70cm程度に弥生時代末から古墳時代初頭の第3遺構面（VII層）が検出された。

第1遺構面

第1遺構面では、現在の地割り方向に沿った耕作痕が検出できた。鋤による痕跡と考えられるが、水田耕作にともなうものであるか、畑作にともなうものであるかについては明確ではない。若干の須恵器片と土師器片のほか、帶金具・古錢等が検出された。

第2遺構面

第2遺構面以下は、洪水砂による平均化以前の旧地形に沿った遺構配置が認められた。標高は調査範囲北西がもっとも高く2.3m付近に位置し、もっとも低い南東側では2.1m程度で、約20cmの高低差があった。第2遺構面を形成する土壤は、西側では主に細砂から中砂であったが、東側および南側では粘性の高いシルト質粗砂であった。西側の微高地を形成する砂は均質で、海岸性堆積物である。調査範囲は西側および北側に砂堆をもち、この砂堆が南東側へ落ち込んでいく部分にあたると考えられた。

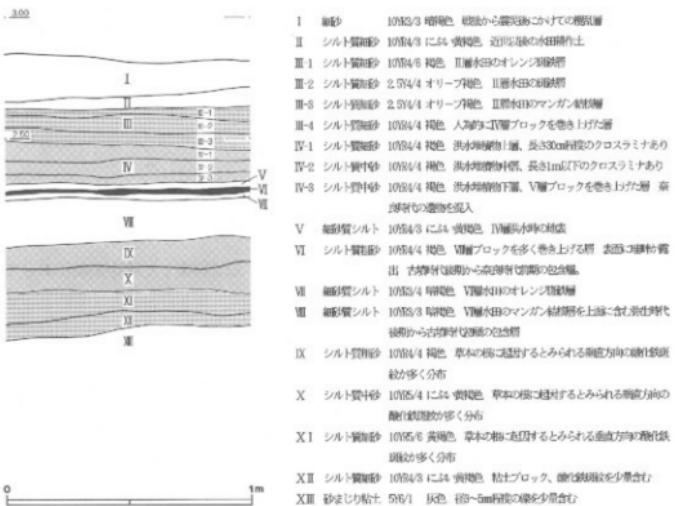
この落ち込み部分にはシルト質粗砂が均一に堆積（VII層）しており、この層を耕作土とする水田が営まれていた。検出された水田跡は規模のわかるもので17筆であったが、砂堆側にも畦畔を追うことができた。水田面からは古墳時代末から奈良時代にあたる須恵器・土師器が出土した。

第2遺構面は、本來西側に広がるものと考えられるが、洪水砂による面的削剥を受け、調査範囲西側の砂堆上には認められなかった。

第3遺構面

第3遺構面は、第2遺構面を形成するシルト質粗砂および第2遺構面の水田床土となる細砂質シルト（VII層）下に点在する、弥生時代末から古墳時代初頭の包含層を上層に含む細砂質シルト（VII層）上に確認できた。包含層は風化した花崗岩層を多量に含む暗色の層で、堆積の原因は不明確であるが、扇状地性堆積物と考えるのが自然であろう。

第3遺構面の標高は、砂堆上部の北西側で第2遺構面とはほぼ同じ2.3mであったが、水田下になる南東側では最大20cm程度の包含層をもち、1.9m付近であった。



第5図 基本層序

検出できた遺構は、円形周溝墓とみられる溝跡2条と、方形周溝墓1基、壺棺を埋設する土壙2基を含む土坑3基、ピット3基である。遺構分布は調査範囲西側の砂堆上に限られており、土質が軟弱になる南東部には連続しない。

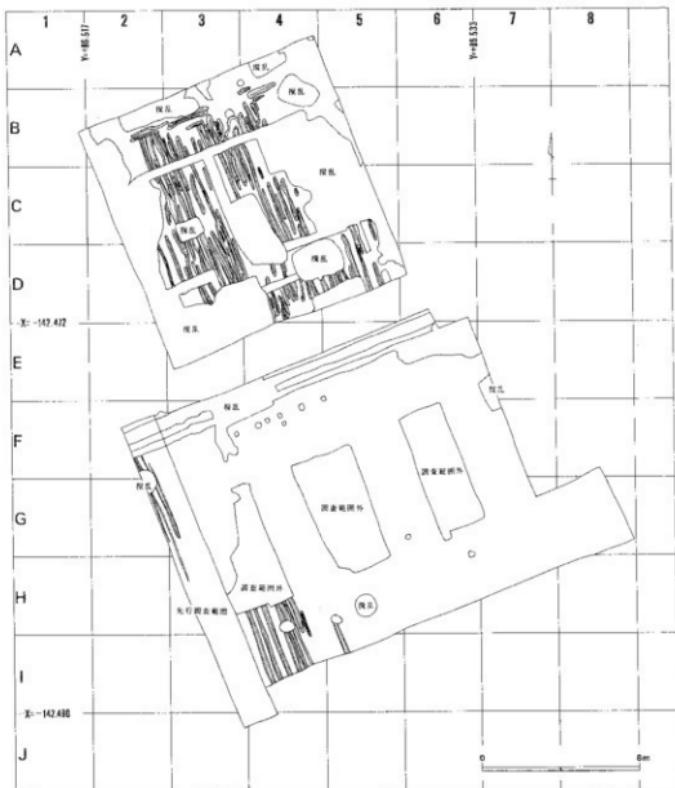
検出された遺構のうち、円形をなす溝跡については、部分調査のため明確な判断を避けたいが、覆土に連続性が認められないこと、繋がりがあると仮定するときわめて不自然な方向に連続すると予想されること、方形周溝墓が存在することなどからみて円形周溝墓と判断したものである。将来周辺を調査する場合の検証が必要である。

出土遺物は、円形周溝墓とみられる溝跡から破碎した土器片がやや多く出土した。第1号周溝墓からはほぼ完形の壺形土器が出土しているが、遺存状態はきわめて悪い。第2号周溝墓を含めいわゆる庄内期の範疇に入れてよい。このほか、第3号周溝墓からは庄内式から布留式間にあたると思われる壺形土器口縁部などが出土した。

壺棺を出土した土壙は2基であるが、比較的の遺存状態がよいのは1基のみであった。洪水層によって上部を破損しているが、複合口縁をもつ大形の壺形土器で、ほぼ全容の分かるものであった。

第3遺構面下の土層は一部に粘土層を挟み、また色調に変化があるものの、一般に均質できわめて淘汰のよい砂層が約2.0mまで続く。湧水のため、さらに下層を確認することはできなかったが、表土下2.2m程度では砂層中から大形流木を検出することができた。下層には泥炭層の存在が予測できる。

なお、以下の報告では、先行調査、およびD・Eグリッド付近を境に反転調査を行なった都合上、調査範囲を先行調査区・北側部分・南側部分と記述することがある。



第6図 第1遺構面全測図 (1/125)

IV. 遺構と遺物

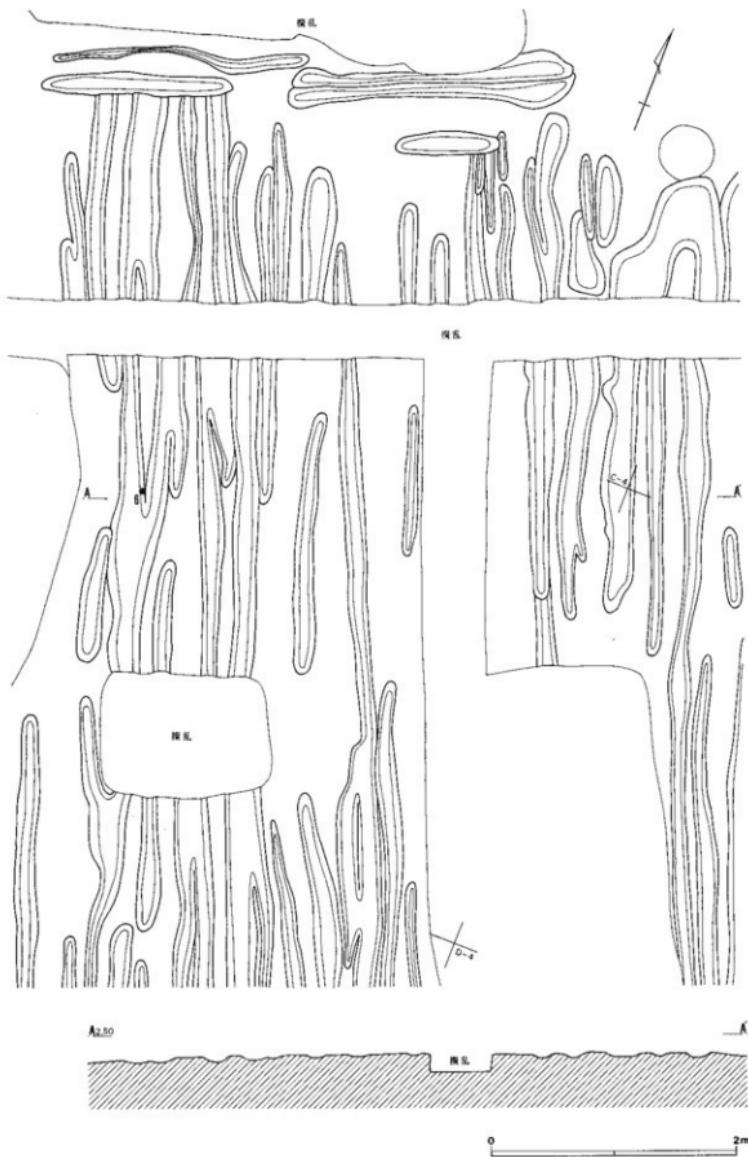
1. 第1遺構面の遺構と遺物

第1遺構面では、溝状にはしる耕作痕を検出した。

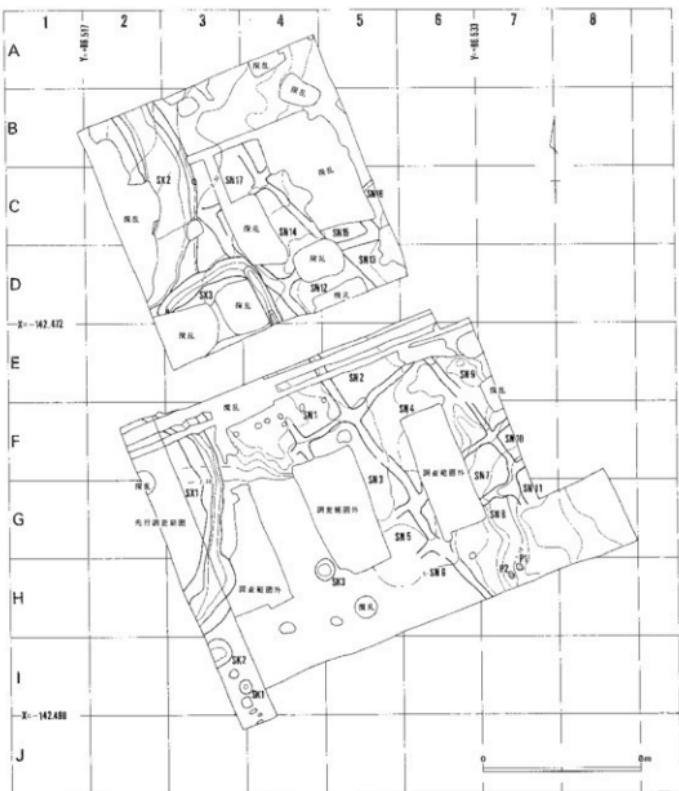
耕作痕（第6・7・13図、第2表）

北側部分の全域および南側部分の調査区西側で検出した。

遺構の確認面は基本層序のⅣ層上であったが、Ⅳ層ブロックが洪水砂によって搅乱された層であるⅣ-3層の状況から、遺構形成当時の耕作痕の掘り込み面は、現況上位15cm程度の位置にあったものと考えられ、本来の遺構面はⅣ-3層にあることがわかった。



第7図 耕作痕



第8図 第2・3遺構面全測図 (1-125)

耕作痕の幅は、9~30cm程度、深さは3~5cm程度で、部分的に切り合いが認められた。しかし、上部を覆っている洪水砂の状況からみて数時期にわたる切り合いの結果と考えるよりは、きわめて短時間のあいだに重複して耕作が行なわれた結果であると考えられる。溝状をなす耕作痕の密度は、1mにつき6~7条程度であった。

洪水砂の流入状況からみて、耕作痕上部は「冊」状の状態であった可能性があるが、田起こし時の水田耕作で同様の痕跡が認められることから、牛馬耕による跡とも考えられる。

出土遺物は奈良・平安時代に比定される若干の土師器・須恵器のほか、銅製帶金具（丸軸裏金具）・古錢を得ることができた。遺構の年代は、これらの出土遺物、および第2遺構面の年代からみて奈良時代後半~平安時代前半を中心とする時期と考えられる。律令的遺物を出土するこの段階で現行地割に沿った土地利用が行なわれていたことがわかる。

2. 第2遺構面の遺構と遺物

第2遺構面では、砂堆と後背湿地の境界付近から湿地側である調査範囲東に広がる水田跡を検出した。

水田跡（第8～13図、第1・2表）

北側部分・南側部分とも東側の緩傾斜地で検出した。面積にして10～20m²前後の小区画水田であった。

区画の全体像、あるいは一辺以上の規模が把握できる総数は17筆である。調査範囲西側の砂堆上に続くオレンジ斑鉄層とマンガン結核の纖維状の土壤化痕跡からみて、本来調査範囲西側にも連続していたと考えられるが、Ⅳ層をのこした洪水による削剝および、Ⅴ層上に作られた耕作痕をもつ農耕地の搅乱によって失われたものと推測できる。先行調査区の西側断面には、洪水直下に連続するオレンジ斑鉄層とマンガンの結核層が明瞭に認められた。

畦畔は洪水によって上部を削剝されており、基部のみを検出できたものである。いずれも土盛りによって形成され、北東側に標高を低下する自然地形に沿って設けられ、傾斜に直行する方向で基部の幅およそ40cmほどの畦畔が走り、これに直行する畦畔は基部の幅およそ10～20cmであった。基部はやや不自然な屈曲をもっているが、上部は本来直線的な区画を成したものと考えられる。

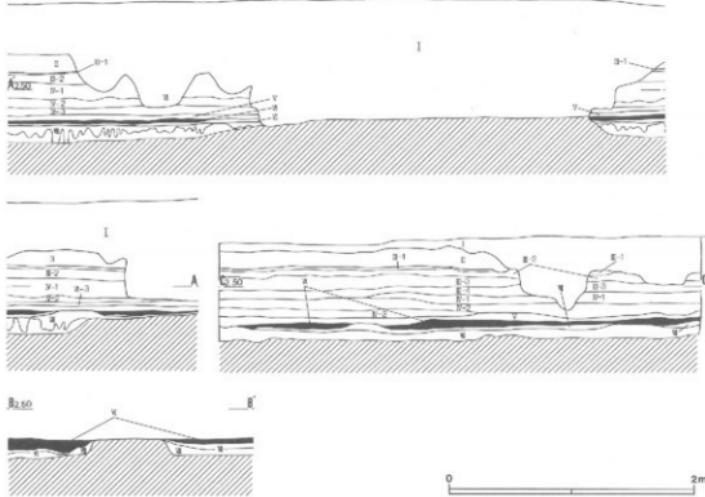
水田跡は方形または長方形で、大きい区画ほど整った方形をなしていた。畦畔によって形成される平坦地の幅によって小区画水田の向きが決定されていると思われる。水田区画は、一筆のうち最大のSN4で5.0×4.7m、形態のわかるもののうち最小のSN7で5.1×2.2mであった。

水口・尻水口等は検出できなかった。津水時期に埋没した水田であれば、水口・尻水口ともに粘質土で塞がれた可能性もあるが、水田面に明確な凹凸や足跡がみられず、使用された段階で埋没した可能性は低いと考えられる。水配りには、いわゆる「かけながし」が利用された可能性もある。

水田耕作土中には古墳時代初めから奈良時代前半の土師器・須恵器が散見されること、奈良～平安時代を中心とした遺物を含むⅣ層の洪水によって削剝を受けていることなどから、古墳時代末から奈良時代前半を中心とした時期に営まれた水田であると考えられる。形態からは古墳時代の水田經營が想定されるが、決め手はない。しかし、第1遺構面との地割の相違は明瞭で、この間に律令的土地利用が開始されたことがうかがえる。

出土遺物の詳細は、第13図および第2表に譲る。

今回検出した水田跡は、細砂を主とする耕作土であったため表面の状況が捉えにくく、検出当初水田跡と断定する条件に欠けたが、耕作土（Ⅶ層）、オレンジ斑鉄層（Ⅵ層）、マンガン結核層（ⅤあるいはⅣ層上面）が明瞭に検出されたこと、断面観察で床土であるⅣ層上面に凹凸が認められたことに加え、SN15・SN16の耕作土および床土を除去する過程で、下層に深く踏み込まれた耕作土・オレンジ斑鉄層・マンガン結核層を検出できることなどから、水田跡であると断定した。また、Ⅳ層にまで及んだ凹凸は、耕作土・床土とも層厚がさほどでなかったため、床土そのものも上層からの耕作・歩行による踏み込みな



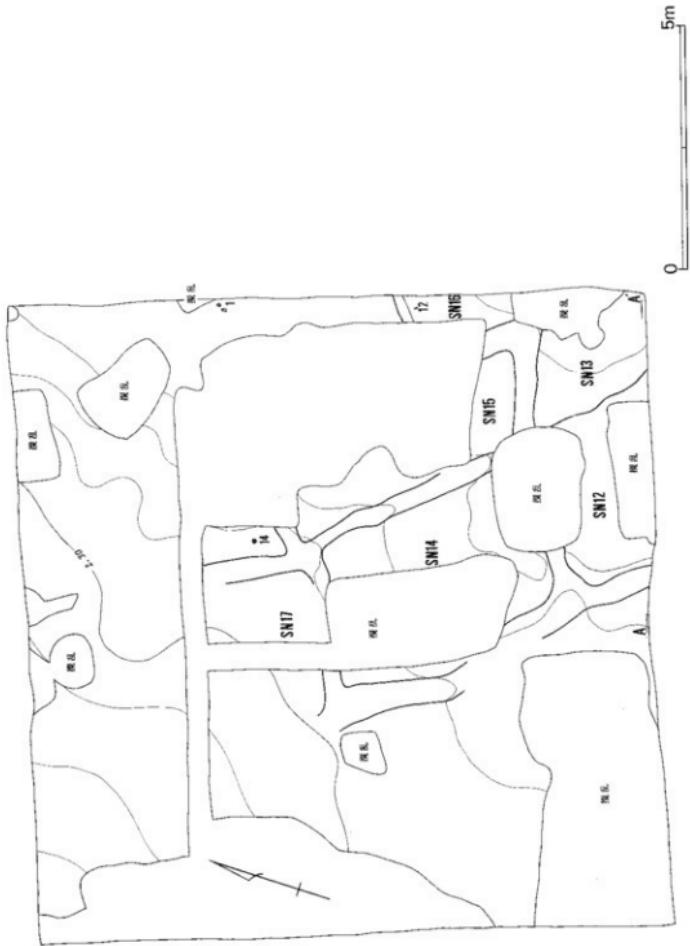
第9図 水田跡断面図

によって摺曲し、下層に食い込んだものと判断した。畔畦部分には土壤化および踏み込みは認められず、段差としての把握にとどまったSN12・SN13間に「疑似畔畦B」を検出することができた。

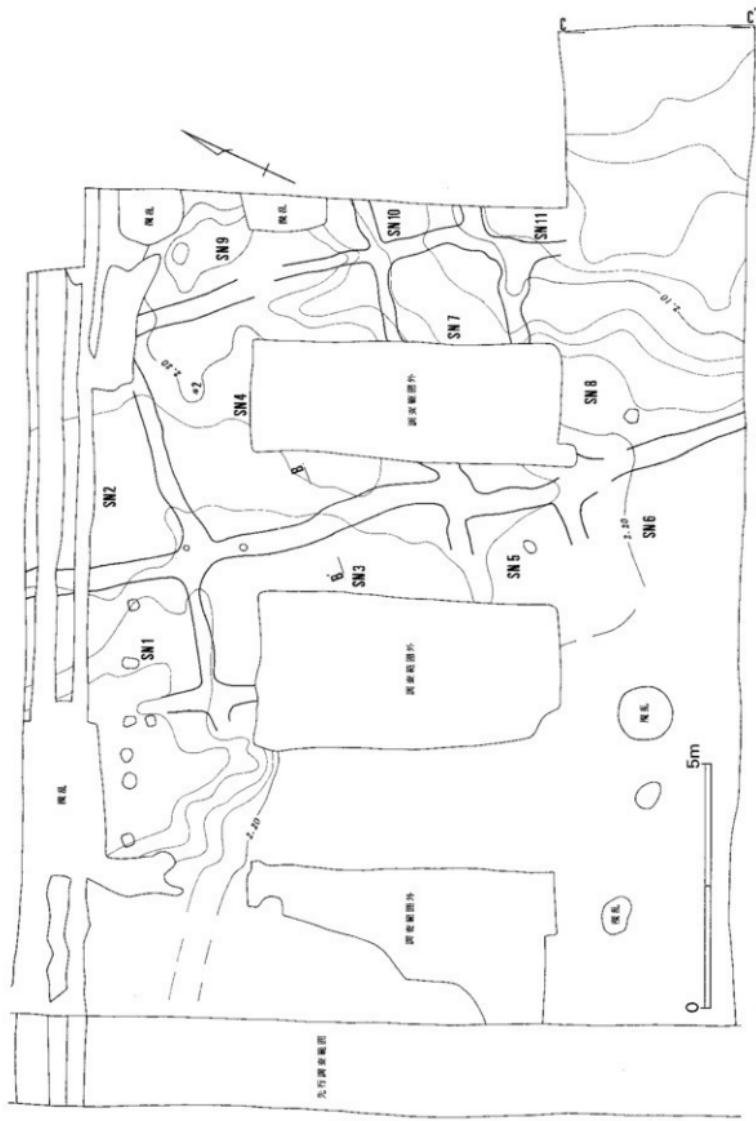
第1表 水田跡

番号	遺構名	南北規模	東西規模	面積	最高点	最低点	水配り	水田面の層位	畔畦の状況	備考
1	SN1		2.42		2.27	2.22	北西→南東	畠	疑似畔畦B	上面削平、マンガン結核層露出
2	SN2		4.40		2.22	2.21	西→東	Y以下	疑似畔畦B	上面削平、マンガン結核層露出
3	SN3	5.24	2.63	13.78	2.24	2.2	北西→南東	畠	疑似畔畦B	上面削平、マンガン結核層露出
4	SN4	4.95	4.66	23.07	2.23	2.15	北西→南東	Y以下	畔畦基部	耕作土上面にわずかな凹凸
5	SN5	1.92						Y以下	畔畦基部	上面削平、オレンジ斑鉄層露出
6	SN6							Y以下	畔畦基部	上面削平、オレンジ斑鉄層露出
7	SN7	2.13	5.15	10.97	2.2	2.11	北西→南東	Y以下	畔畦基部	耕作土上面にわずかな凹凸
8	SN8		4.13		2.17	2.08	北西→南東	Y以下	畔畦基部	耕作土上面にわずかな凹凸
9	SN9	5.00			2.2		北西→南東	Y以下	畔畦基部	耕作土上面にわずかな凹凸
10	SN10	1.75				2.14	北西→南東	Y以下	畔畦基部	耕作土上面にわずかな凹凸
11	SN11				2.08	2.23	北西→南東	Y以下	畔畦基部	耕作土上面にわずかな凹凸
12	SN12		3.33		2.25		北西→南東	Y以下	畔畦基部	部分的に薄い耕作土遺る、東畦は段差のみ
13	SN13					2.22	北西→南東	Y以下	不明	部分的に薄い耕作土遺る、東畦は段差のみ
14	SN14	4.40	3.39	14.92	2.29	2.23	北西→南東	Y以下	不明	上面削平、オレンジ斑鉄層露出
15	SN15	4.65	1.76	8.18	2.28		北西→南東	Y以下	畔畦基部	薄い耕作土上面にわずかな凹凸
16	SN16					2.29	北西→南東	Y以下	畔畦基部	薄い耕作土上面にわずかな凹凸
17	SN17		3.00				北西→南東	畠	不明	上面削平、マンガン結核層露出

第10图 北侧部分水田跡

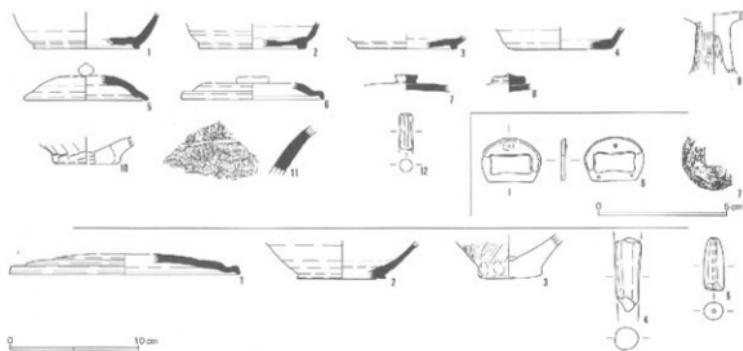


第11图 南侧部分水田绘





第12図 水田下面の状況



第13図 水田跡(上：1～12)とその他(中・下：1～7)の出土遺物

第2表 水田跡とその他の出土遺物調査表

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	外側 内面	内面	残存率	層位	備考
水田面												
1	須恵器	高台杯			(8.3)	SE.T.S	A	灰白	灰白	25	VII	高台径8.3cm、高台高0.4cm、削り出し高台、曲面ヘラ削り
2	須恵器	高台杯			(8.4)	SE.T.S	B	灰	灰	20	VIII	高台径8.4cm、高台高0.3cm、削り出し高台、曲面ヘラ削り
3	須恵器	高台杯			7.8	SE.T.S	B	灰	灰	20	VII	削り出し高台、底部周辺回転ヘラナデ
4	須恵器	杯			(8.2)	SE.T.S	B	灰白	灰白	20	VIII	体部ロクロナデ、底部回転ヘラ削り
5	須恵器	蓋	(9.7)	1.9		SE.T.S	A	灰白	灰白	20	VIII	ロクロナデ
6	須恵器	蓋	(11.2)	1.8		SE.T.S	B	灰白	灰白	20	VIII	ロクロナデ
7	須恵器	蓋				SE.T.S	A	灰白	灰白	100	Ⅸ	つまみ径2.6cm
8	須恵器	蓋				SE.T.S	A	灰白	灰白	80	VIII	つまみ径1.8cm
9	土師器	高环脚				SET.U.S.R	C	浅黄褐色	浅黄褐色	75	VIII	外腹ミガキ
10	土師器	支			5.2	SET.U.S.R	B	明黄褐色	褐	40	VIII	脚部ヘラ削り
11	須恵器	支				SE.T.S	A	灰白	灰白	5	VIII	3段の腰掛け波状文
12	土製品	不明土製品			径0.9~1.0cm		B	浅黄		100	Ⅸ	面取りあり
合層												
1	須恵器	蓋	(19.0)			SE.T.S	A	灰	灰	20	V	ロクロナデ
2	須恵器	杯			6.8	SE.T.S	B	灰白	灰白	20	VIII	底面圓弧条切り
3	土師器	支			5.0	SET.U.S.R	B	にぶい縁	浅黄	100	VIII	脚部ハケ目彫形、底部付近に指紋圧痕
4	土製品	不明土製品			径1.7~2.1cm	SE.T.S.R	B	明黄褐色		90	Ⅸ	脚部十器底部の尖底部か 面取りあり、孔径0.3cm
5	土製品	土鍬			長さ4.1cm、径1.6cm	SE.T.U.S	B	褐		100	VIII	
6	銅製品	丸解底全具			たて約1.6cm、横1.6cm					40	V	下半部欠損
7	銅鏡	□口元宝			直径2.4cm、郭径0.7cm					50	VII	「元」は行書、開元通宝もしく は淳化元宝か



作業風景

3. 第3遺構面の遺構と遺物

第3遺構面は主に弥生時代末～古墳時代初頭にあたる。基本層序のⅣ層上面が遺構面である。

遺構分布は微地形に規制されており、調査範囲西側の砂堆上に円形周溝墓2基、方形周溝墓1基が重複しながら密集し、周溝墓の分布域周辺を取り巻く後背湿地にかけての緩傾斜に壇棺墓2基・土坑1基が散在していた。

後背湿地部分には薄い包含層と2基のピットが分布していたが、明確な遺構は検出できなかった。この他、第2号円形周溝墓の周溝外側上端に接してピット1基を検出することができた。

出土遺物は、周溝墓では溝内に流入したと思われる遺物がほとんどを占め、遺構に明瞭にともなうものは第3号方形周溝墓で出土した複合口縁壺・單口縁壺に限られる。また、第3号土壙から出土した大形の壺形土器は壇棺墓とみられ、口縁部を欠くものの全体像の分かる良好な資料である。

他に、調査範囲西側の遺構分布範囲を中心に広がる包含層から弥生時代後期～古墳時代初頭にかかる土器片が28リットル入りコンテナにして約3箱分出土したが、風化のため著しく状態がわるく、良好な資料は得られなかった。

第1号周溝墓（SX1）（第8・14・15図）

F2、F3、G3、H3グリッドで検出した整った弧をなす溝状遺構である。F2、F3グリッド付近は、震災時に倒壊した建物で用いられていた污水管およびガス管の埋設工事による搅乱を受け、破壊されていた。

先行調査ではトレンチ内に斜めにかかっており幅の広い溝状遺構であると考えたが、本調査時点では溝状遺構の延長上と予想される部分に関連する遺構を確認することができなかつた。このため、付近を重点的に調査した結果、溝状遺構が弧を描きながら北側へ延びていることが確認できた。

当初の調査計画では、復興事業に係わる基本方針に従い、計画された共同住宅の基礎部分以外は調査対象地外となっていたため、この部分にかかる溝状遺構の性格および形状を把握することが難しいと考えられた。そこで、神戸市・施工業者、および共同住宅の所有者である柳原氏に、復興事業の妨げにならないことを確認の上、面積にして約5m²の拡張調査を行いたい旨を申し入れた。協議の結果、承諾をえることができ、共同住宅建設地にかかるほとんどの部分の溝跡を検出することができた。

拡張調査の結果、溝跡の描く弧は、溝内側の直径約14m前後の整った曲線となることがわかつた。

北側部分の調査にあたり、この溝跡の延長が確認できることを期待したが、予想に反して、南側部分で検出した遺構にきわめて類似した西側に円を描く溝状遺構が検出された。覆土の一部に共通点はあるが、北側部分で検出した溝状遺構の溝底幅は、平均でも1.30m程度と著しく広い。また、南側部分で検出した溝跡と連続すると考えるにはE1グリッド付近で不自然な形状を想定しなければならなかつた。さらに、北側部分では弧状になる溝跡と重複して、小形の方形周溝墓が検出された。

これらのことから、南側部分および北側部分で検出した整った弧を描く溝状遺構は、円形周溝墓の可能性が高いと判断した。略称を SXとしたのはこのためである。円形周溝墓と想定する場合、周溝内径で14m程度の周溝墓となり、付近の深江北町・郡家遺跡などにみられる径5~7m程度の周溝墓群に比べ、著しく大形の周溝墓となる。

なお、周溝部には、溝内土壠や溝内埋葬の痕跡は認められなかつたが、周辺に後述する壺棺墓および土坑が検出できたことから、調査範囲西側に延びる砂堆上が当該期の墓域として用いられていたものと推測できる。

検出できた溝部の総延長は約11m、上端の幅1.92~3.52m、下端の幅0.24~0.32m、確認面から底面までの深さは約0.70mであった。断面形態はY字形に近い葉研状をなし、底面から0.40m程度の高さで内側へ突出し中段を形成していた。覆土は細別すれば12層からなるが、底部付近に堆積した壁面の崩落土を除けば、ほぼ最上層まで砂層を含む黒色の有機質土壤が堆積していた。水流の痕跡は認められなかつた。

底面には多くの凸凹が認められたが、レヴェルはほぼ一定であった。凹凸は、壁面から崩落した砂質シルト・砂まじり粘土・シルト質砂層のブロック間に上層の黒色有機質土が堆積したものと考えられる。

墳丘側は先行調査時に精査されたが、主体部等は検出できなかつた。

出土遺物

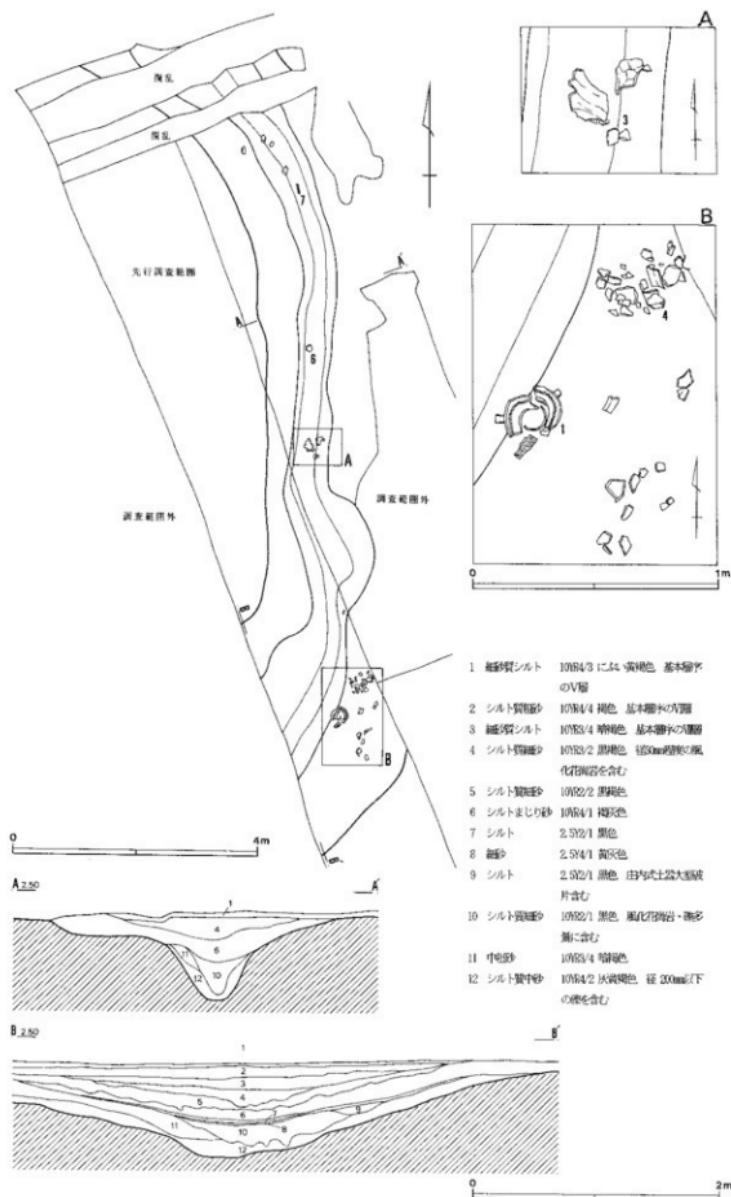
出土遺物は、溝部の6層内に集中していたが、細片が中心で埴層から流入したものと考えられる。10層以下では少なかったが、上層に比べ大形の破片が採取できた。

1・2は壺形土器である。1は先行調査区内の溝底付近で出土した。複合口縁をもつ。口縁部外面には6本1単位の備つき波状紋が2段、頸部と口縁部内面にも6本1単位の備つき波状紋がめぐる。口唇部および口縁端部には刺突が施されている。付近に胴部破片とみられる土器の集中地点があったが、風化のため接合関係は把握できなかつた。法量は、口縁部径20.2cm、口縁部高さ3.5cm、頸部径11.7cmである。器壁はやや厚く、口縁部上端付近で0.5cm、頸部で1.2cm程度である。胎土は石英・長石・白雲母・白色細砂を含み、やや粗い。焼成はやや不良である。色調は、内外面とも2.5Y 6 / 2灰黄色である。残存率は約25%である。

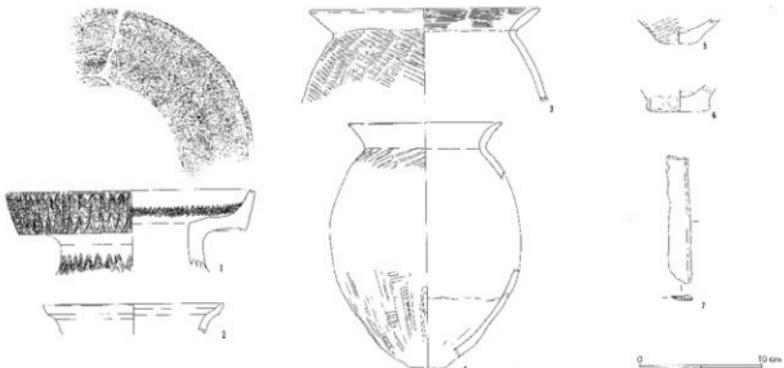
2は本調査の10層内で出土した。口縁部上端が受け口状に開く。調整は不明である。口縁部径は14.6cm程度であろう。胎土は石英・長石・白雲母・白色細砂を含み、やや粗い。焼成は良好である。色調は、内外面とも7.5YR 7 / 6橙色である。残存率は約20%である。

3~5は壺形土器である。3は本調査の10層上面で出土した。内面を上に向かた状況で検出された。付近には同一個体と思われる破片が多く、5の壺形土器底部もその一つである。胴部上半に短く「く字」状に開く口縁部がつく。胴部にはやや粗い「連続ラセンタキ」が施され、部分的にタタキに用いた工具によるナデが認められる。タタキ目の単位は7条程度である。口縁部内面はハケ状工具でナデつけられている。法量は、口縁部径18.7cm程度である。器壁はやや薄く、口縁部付近で0.8cm、胴部で0.5cm程度である。胎土は石英・長石・白雲母・白色細砂・黒色細砂・赤色粒を含み、非常に粗い。焼成は良好である。色調は、外面10YR 7 / 2にぶい黄橙色、内面10YR 8 / 3浅黄橙色である。残存率は約20%である。

4は先行調査区の10層内に出土した。胴部上半に「く字」状に開く口縁部がつき、胴部



第14図 第1号周溝墓



第15図 第1号周溝墓出土遺物

中央付近に最大径をもつ。調整は、胴部上半にやや粗い斜位の「連続ラセンタタキ」を施し、下半部は横位のタタキの後、タテナデをしている。タタキ目の単位は不明である。口縁部内面の調整は風化のため不明であるが、胴部下半はタテナデされている。ナデの単位は明瞭でない。法量は、口縁部径12.6cm、頸部径9.6cm、底部径2.9cm程度である。器壁はやや薄く、口縁部付近で0.5cm、胴部で0.5~0.7cm程度である。胎土は石英・長石・細砂・赤色粒を含み、粗い。焼成は良好である。色調は、内外面とも2.5Y6.5/1黄灰色である。残存率は約25%である。

5は本調査の10層上面で出土した。3と同一個体の可能性がある。「連続ラセンタタキ」が施される。タタキ目の単位は7条程度である。底部径3.2cm程度である。胎土は石英・長石・白雲母・白色細砂・黒色細砂を含み、非常に粗い。焼成は良好である。色調は、外面10YR 7/2にぶい黄橙色、内面10YR 8/3浅黄橙色である。残存率は80%である。

6は壺形土器底部である。10層内で出土した。内面には指ナデによる指頭圧痕がつく。法量は、底部径3.1cm程度である。胎土は石英・長石・白雲母・白色細砂・赤色粒を含み、非常に粗い。焼成は良好である。色調は、内外面とも7.5YR 7/6橙色である。残存率は約70%である。

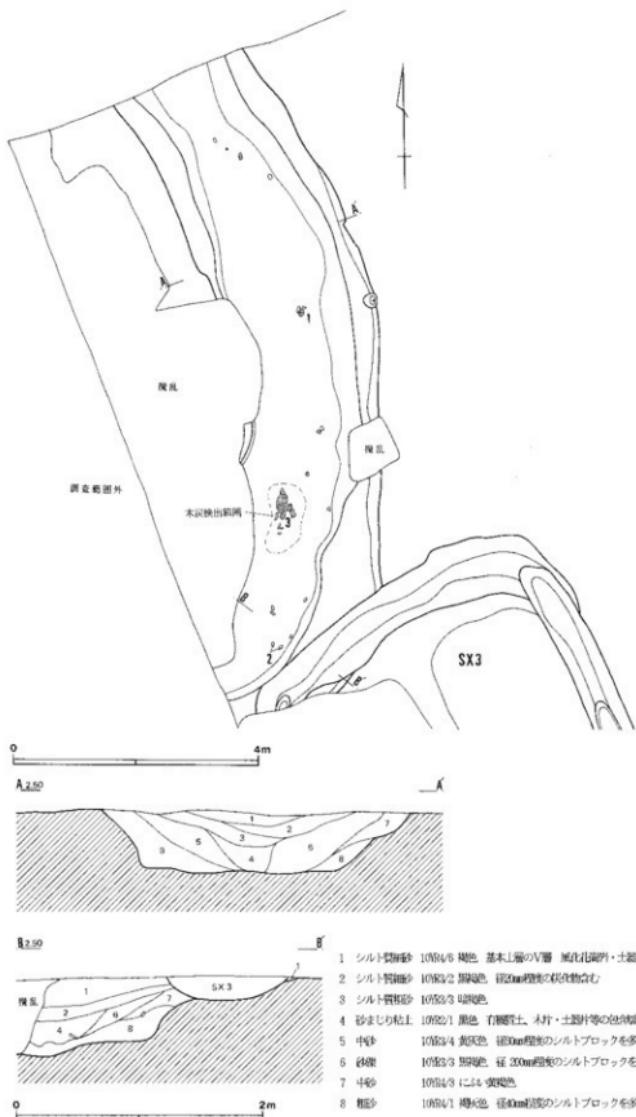
7は木片である。底面に接して出土した。割材の可能性はあるが、加工痕はない。

第2号周溝墓 (SX 2) (第8・16・17図)

B2, B3, C2, C3, D2, D3グリッドで検出した整った弧をなす溝状遺構である。弧の内側にあたる部分は、駐車場基礎および駐車場建設前の建物廃棄物の埋め立てによって激しく搅乱されており、溝部西側上端の様相は明確に把握できなかった。

南側部分で検出した溝跡（第1号円形周溝墓）にきわめて類似した西側に弧を描く溝状遺構であり、溝底幅の差異および南側検出の溝跡との連続性を推定しにくくこと、重複する第3号方形周溝墓の存在から、円形周溝墓と推測した。

現状から墳丘規模を想定すると、周溝内径約14m前後の整った曲線となり、第1号円形



第16図 第2号周溝墓



第17図 第2周溝墓出土遺物

周溝墓とほぼ同規模の大形周溝墓であると考えられる。

検出できた溝部の総延長は約11m、上端の幅2.24~2.48m、下端の幅は0.64~1.52mで平均的に1.30m前後であった。確認面から底面までの深さは0.96~1.28mであった。いずれの規模も第1号円形周溝墓をやや上回るが、溝底部の幅が非常に広く、整っていることが印象的である。

溝の断面形態は広い葉研状をなし、底面から0.30m程度の高さで中段を形成していた。底面から中段までは部分的に傾斜が緩む箇所がみられたが、基本的には垂直に近い立ち上がりをなしていた。中段以上の部分は、なだらかに広がり周溝上端付近で急激に立ち上がっていた。なお、水流の痕跡は認められなかった。

周溝内には、溝内土壙や溝内埋葬の痕跡は認められなかった。また、墳丘側にも主体部等の施設を検出することはできなかった。

覆土は細別すれば9層からなる。このうち1~3層は主に基本層序に対応しており、3層が古墳時代初頭頃の包含層にあたる。4層以下は当遺構の埋積土である。4層は黒色の有機質土で、上面に多量の炭化物が認められた。中段以下の壁際には急激に立ち上がる壁面からの崩落土のブロックが多量に堆積していた。

出土遺物

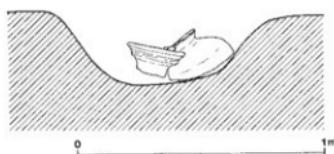
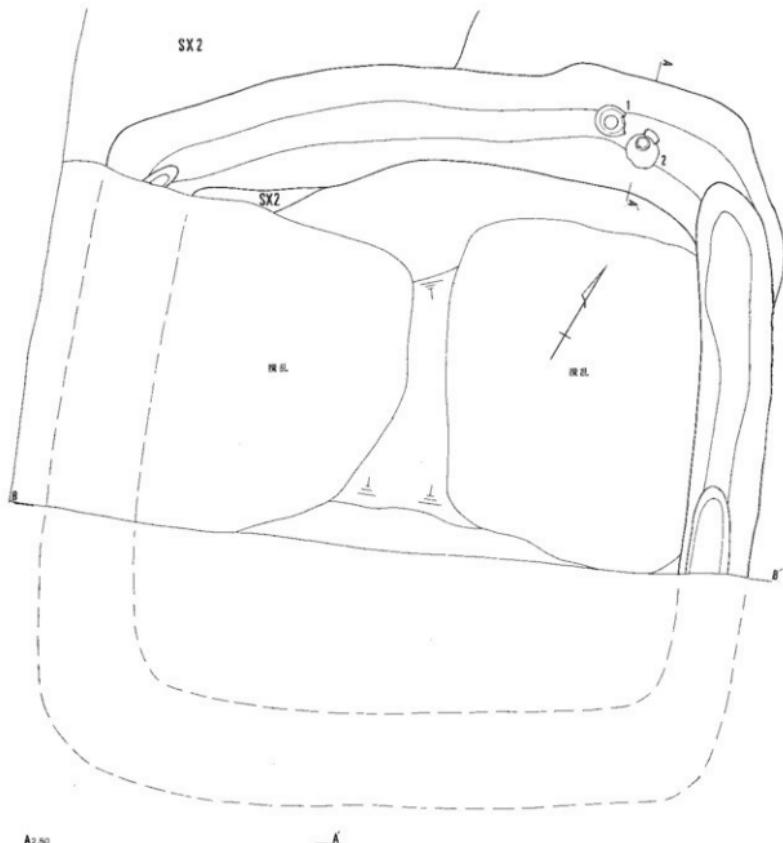
出土遺物の多くは4層内または4層と8層の境界部分に集中していたが、多くは細片であった。8層内には「連続ラセンタタキ」を施す変形土器片のほか、少數ながら形狀の把握できる遺物が埋没していた。本来に当遺構にともなうものであると断定することはできないが、当遺構の造営にきわめて近い時期のものと考えることができる。また、4層上面には多量の炭化物が散在しており、一部には集中部分が認められた。

1は変形土器口縁部である。底面より10cm程度浮いた8層内で検出した。複数の破片が集中しており、接合しなかったものの、胎土等より同一個体と考えてよいだろう。口縁部は開かずに立ち上がり受け口状をなす。内面にはやや粗いハケ状工具によるナデがほどこされていたが、外面の調整は風化のため明瞭ではない。口縁部径は推定で13.4cmである。胎土は石英・長石・白雲母・黒雲母・白色細砂・黒色細砂・赤色粒を含み、やや粗い。焼成はやや不良である。色調は、外側7.5YR 6/6橙色、内側7.5YR 7/6橙色である。

2は小形の変形土器である。8層内で出土した。内面を上に向けて破碎した状況で検出された。器形は胴部上半に最大径をもち、底部は丸底になるものと思われる。胴部外面はやや粗いミガキが施される。内面は目の細かいハケ状工具によってナデつけられている。胴部下半との境界付近に明瞭な胎土の雜ざり目が認められる。胴部最大径は推定で13.9cm程度である。器壁は厚く0.7cm程度である。胎土は石英・長石・白雲母・白色細砂・黒色細砂を含み、やや粗い。焼成は良好である。色調は、内外面ともに10YR 7/3にぶい黄橙色で、黒斑が認められる。残存率は約30%である。

3は木片である。4層上面の木炭集中部の中央付近で出土した。加工痕はみられない。自然木である。広葉樹と思われる。

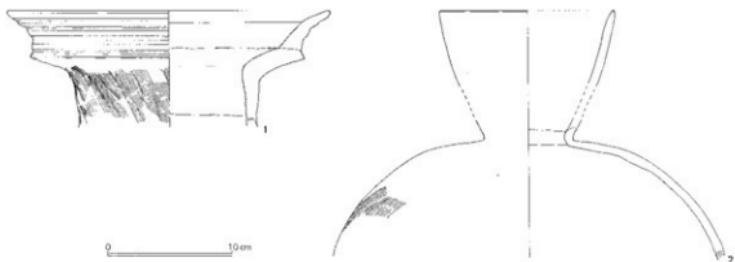
他に外面にミガキを施す柱状の高杯脚部片等が出土した。



1 磁性質シルト 10.5/3 明褐色 基本層中の層岩 1面にマンガン結晶層あり

2 シルト質細砂 10.5/4 明褐色、風化表面・礫多頭に含む

第18図 第3号周清墓



第19図 第3号周溝墓出土遺物

第3号周溝墓（SX 3）（第8・18・19図）

D2, D3, D4グリッドで検出した方形周溝墓である。

方台部および南西側の周溝は、すべて駐車場基礎および駐車場建設前の建物廃材埋め立てによって破壊されていた。

第2号円形周溝墓の周溝と重複関係にあり、当遺構が第2号円形周溝墓に遅れて作られていた。

推定できる規模は、周溝外側上端で一辺5m前後、方台部は一辺約4m前後で、整った方形をなしていた。

検出できた溝部の総延長は約8m、上端の幅0.56~1.00m、下端の幅は0.15~0.25mであった。確認面から底面までの深さは最深部で0.36mであった。

溝の断面形態は整った逆台形をなし、壁面は底面から直線的に立ち上がっていた。水流の痕跡は認められなかった。

周溝底面には、東側および各隅部に段差が確認できたが、溝内土壌や溝内埋葬の痕跡は認められなかった。方台部側は、東西に2ヶ所の深い搅乱を挟んで上部に薄い搅乱層をのせた未破壊の部分が遺存していた。この部分を中心に精査を行なったが、主体部等の施設を検出することはできなかった。

覆土は2層からなる。1層は基本層序のうち古墳時代初頭頃の包含層にあたる。2層は当遺構の埋積土であるが、基本的な堆積状況は1層に近い。2層中には少量の炭化物が認められた。

出土遺物

出土遺物は北東側隅部付近で2個体の大形品を得たほか、細片が少量出土したに過ぎない。

1は壺形土器口縁部である。底面より4cm程度浮いていたが、当遺構にともなうものと考えてよいだろう。頸部の胎土継ぎ目付近できれいに割れており、隣接して出土した2の壺形土器との関係を考慮すれば、器台として用いられた可能性もある。口縁部は4条の凹線紋がめぐる複合口縁で、大きく外反する。頸部との胎土の継ぎ方は疑似口縁的に外反させた頸部上端に口縁部を乗せる方法を探る。頸部は非常に細かいハケ状工具によるナデつけが行なわれている。口縁部径は推定で26.0cmである。胎土は石英・長石・白雲母・黒雲母・白色細砂・黒色細砂・赤色粒を含み、非常に粗い。焼成はやや不良である。色調は、

外面10YR 7 / 4にぼい黄橙色、内面5 YR 6 / 6橙色である。部分残存率は100%である。

2は壺形土器である。1の壺形土器と隣接し、溝壁面に接して出土した。口縁部と思われる破片が胴部上に認められたが、土器全体がすでに風化によって粘土化しており、復元・接合等是不可能であった。外面には部分的にハケ状工具によるナデつけが施される。出土した時点でかなりの歪みがあり正確な測量ができなかったため、当該土器の図は概略図である。胎土は石英・長石・白雲母・白色細砂・黒色細砂・赤色粒を含み、非常に粗い。焼成は良好である。色調は、外面10YR 6 / 6明赤褐色、内面10YR 6 / 3にぼい黄褐色である。部分残存率はほぼ100%である。

1・2は方台部より転落した可能性もある。出土位置などからみて何らかの祭祀的行為によって付近に置かれたものと考えるのが自然であろう。

出土遺物より弥生時代後期から古墳時代初頭頃の所産と思われる。

第1号土壙（SK 1）（第20図）

先行調査における第3遺構面Ⅰ3.I4グリッドでみつかった。上部は削平されていたが、内部には大形の土器胴部下半が埋設されていた。平面形態はほぼ正円形であった。長軸方向で0.64m、短軸方向で0.62m、確認面からの深さは約0.32mであった。覆土はおよそ単層であり、本来は中空であったと思われる。これらの状況に加え、付近のH4、II5グリッドから弥生時代後期のものとみられる壺棺墓（SK 3）が検出されており、当遺構も壺棺であった可能性が高い。

掘方は周辺の土層が土石流によって形成されたため、検出することができなかった。

当遺構の土器は風化がはげしく、粘土化していたため、周囲の地層ごと取り上げたが、復元は不可能であった。

第2号土坑（SK 2）（第20・21図）

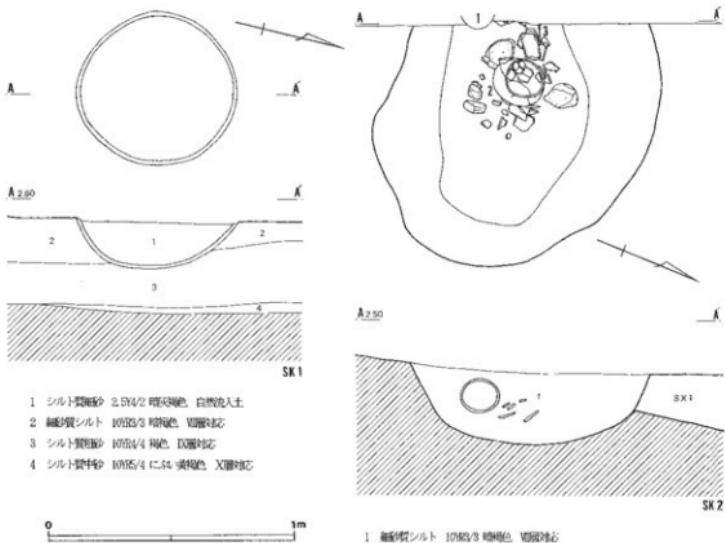
先行調査のI3グリッドでみつかった。西側部分は調査区限界にかかり調査できなかった。平面形態は東西に長い不整な椭円形であった。検出できた部分の規模は長軸方向で1.26m、短軸方向で1.08mであったが、長軸方向は1.40m程度になるものと思われる。確認面からの深さは約0.34mであった。覆土は単層であった。

出土遺物

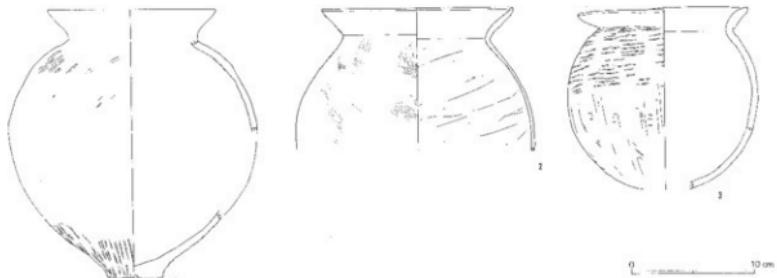
内部からは、中形の壺形土器をはじめ、3個体の土器が出土している。

1は調査区西側断面にかかる出土した。風化が激しく、上半と下半を接合することはできなかったが、胎土・調整、および出土状態から同一個体と判断した。胴部上半部は粗い「連続ラセンタタキ」が認められ、下半部は継位のタタキを施している。タタキ目の単位は7条程度である。内面の調整は不明である。二次的に被熱した形跡がある。底部径は4.5cmである。器壁はやや厚く、0.5~0.8cm程度である。胎土は石英・長石・細砂・チャートを含み、粗い。焼成は良好である。色調は、内外面とも5 YR 5 / 6明赤褐色である。残存率は底部で100%、胴部で25%である。

2は土坑中央で正位に出土した。「く字」状に開く口縁部がつき、口縁端部がつまみあげられる。調整は口縁部をヨコナデし、胴部上半にタテハケ、肩部から胴部下半に斜位のハケが施される。内面にはヘラナデが認められる。ハケの単位は8条程度である。二次的に被熱した形跡がある。口縁部径15.5cm、頸部径12.0cm、胴部最大径19.4cm程度である。



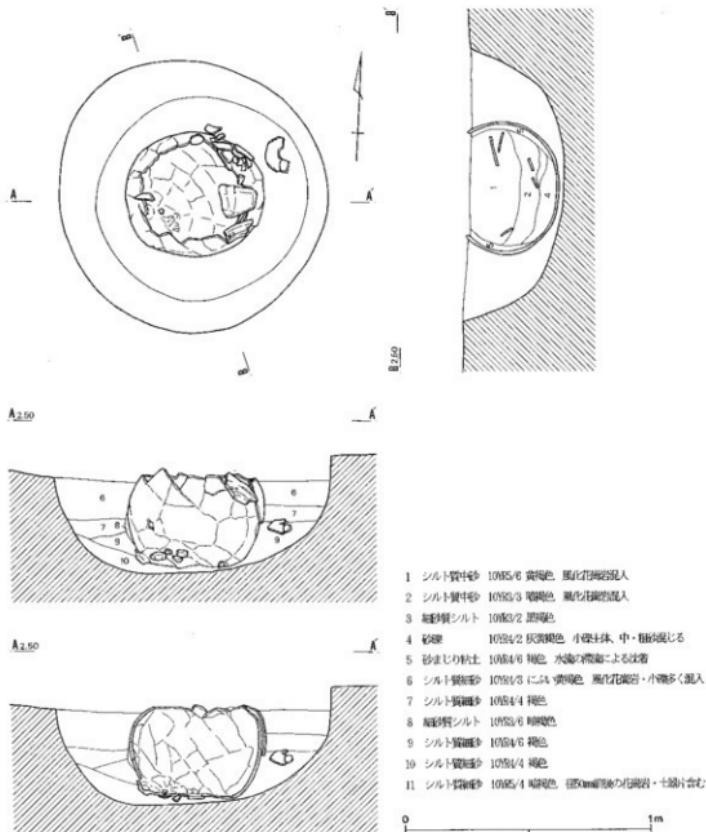
第20図 第1号・第2号土壤



第21図 第2号坑出土遺物

器壁は薄く、口縁部付近で0.5cm、胴部で0.3cm程度である。胎土は石英・長石・細砂・チャートを含み、やや粗い。焼成は良好である。色調は、内外面とも7.5YR 2/3 にびい橙色～10YR 6/4 にびい黄褐色である。残存率は65%である。

3は、1・2の下部に破碎された状態で散乱していた。胴部上半に短く「く字」状に開く口縁部がつく。胴部には「連続ラセンタタキ」が施されるが、下半はタタキ後タテナデされている。タタキ目の単位は6条程度である。二次的な被熱の形跡がある。法量は、口縁部径14.0cm程度、胴部最大径15.5cmである。器壁はやや厚く、口縁部付近で0.8cm、胴部で0.6cm程度である。胎土は石英・長石・細砂・赤色粒を含み、粗い。焼成は良好であ



第22図 第3号土壤

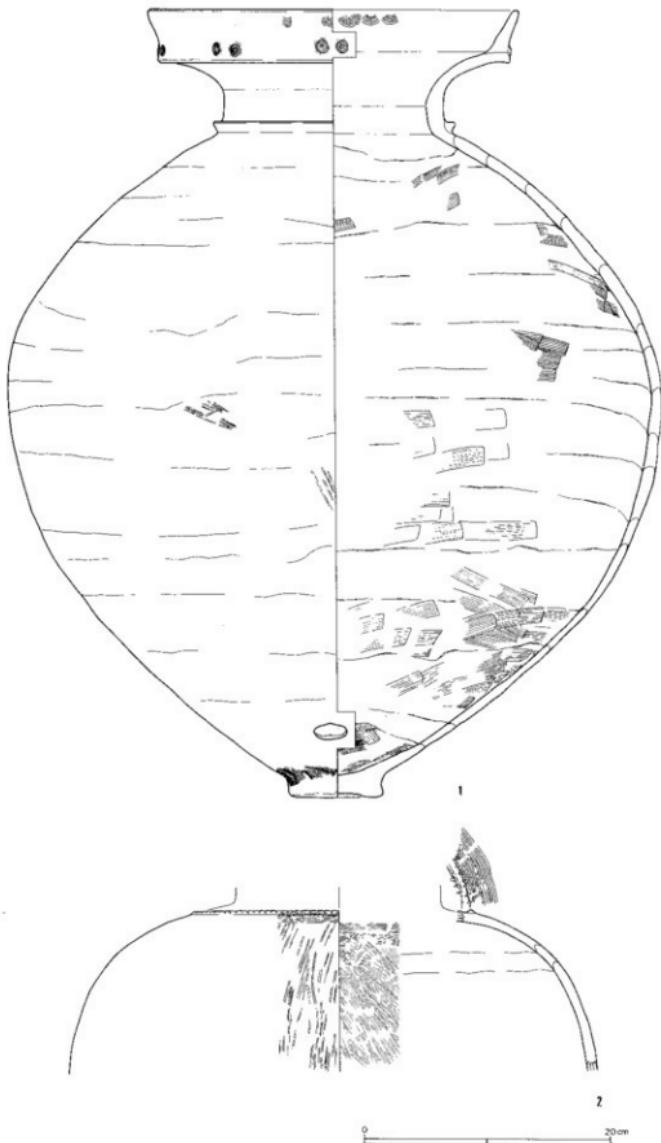
る。色調は、内外面とも10YR 6 / 2 灰黄褐色である。残存率は約50%である。

第3号土壤 (SK 3) (第22・23図)

H4. H5グリッドでみつかった壺棺墓である。正円形に掘られた掘方に人形の壺形土器を埋設したものである。掘方は東西1.10m、南北1.12mで、底面は平坦な底面からやや急激に立ち上がっていた。

内部の壺形土器は垂直角では約45度傾き、水平角では N - 88° - E の向きで埋設されていた。上部はIV層の洪水によって破損していたが、口縁部の一部が掘方内部に落ち込んだ状態で逆位に残存していた。土器棺内部は洪水以前まで中空であったとみられ、洪水砂とともにいくつかの大形破片が崩落していた。

口縁部がみつかった部分では土器が2重に重なっており、埋設することを考えると、当



第23図 第3号土壤出土遺物

初から頸部上半を割りとて逆位にして胴部に被せた場合を想定しなければならない。

また、本米頸部が接合する部分には長径15cm程度の花崗岩が検出された。復元作業の結果、当該遺構には大形の壺形土器以外に別個体の壺形土器の大形破片が混入していることが分かった。検出された花崗岩は大形の壺形土器に蓋として被せた大形破片を抑えるためのものであった可能性もある。この場合、壺形土器胴部に頸部を割りとて被せ、さらに頸部中央の穴を別個体の土器片で塞いだものと推測できる。

壺形土器は底部付近に外部からの穿孔が認められた。土器下部には複数の花崗岩削石が検出されており、接合しない破片で穿孔部が外側から塞がれていた。排水を考慮したものと考えられる。

出土遺物

1は壺棺の主体をなす大形の壺形土器である。底面付近は埋設の際、あるいは埋設後の自重によって破損していた。また胴部上半はほげしく風化していた。頸部から口縁部にかけての大半を欠損するが、2個一对で1単位を構成する円形浮紋が8単位めぐる複合口縁を有し、口縁部上端付近には櫛掻きによる半円形紋が施されている。頸部には突帯がつく。胴部外面は本来ハケ状工具によるナデつけ後、ミガキが施されていたものであるが、風化のためほとんど観察することができなかった。内面についても風化が進んでいたが部分的にハケ状工具によるナデつけが施されていた。いわゆる輪積み痕が明瞭であるが、乱れる部分がある。最大径は胴部中央やや上部にあり、胴部下半は部分的に直線状をなす。底部は突出し、外面が窪む。口縁部径は推定で約32.0cm、器高64.0cm、底部径7.6cmである。器壁は厚く、口縁部付近で0.5cm、頸部で0.7cm、胴部上半で0.5cm、胴部下半で0.3cm、底部で0.8cm程度である。胎土は石英・長石・白雲母・白色細砂・黒色細砂・赤色粒を含み、非常に粗い。焼成は良好である。色調は、外面10YR 7/2にぶい黄橙色で、部分的に黒斑が認められる。残存率は口縁部・頸部を除き100%である。

2は壺形土器である。1の壺形土器口縁部付近で採集した。全体の器形は不明であるが、頸部基部には半截竹管による刺突紋を施された2条の突帯がめぐる。突帯外側には櫛掻き波状紋と直線紋が認められる。胴部外面は非常に細かいミガキ、内面は丁寧なナナメ方向のナデつけが施されている。胎土は石英・長石・白雲母・黒雲母・白色細砂・黒色細砂・赤色粒を含み、やや粗い。焼成は非常に良好である。色調は、外面10YR 7/4にぶい黄橙色である。

ピット1（P 1）（第24図）

南側部分のH7グリッドでみつかった。長径40cm、短径24cm、深さ6cmであった。弥生時代後期～古墳時代初頭の包含層である埴層に由来する細砂質シルトの単層で埋没していた。

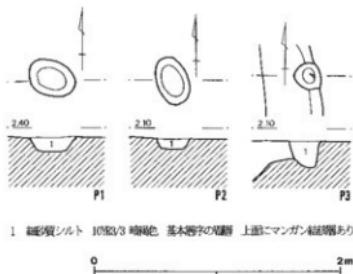
底面はすり鉢状で、壁面は急激に立ち上がっていた。

内部より、土器片4点が出土したが、図示できるものはなかった。

ピット2（P 2）（第24図）

南側部分のH7グリッドでみつかった。長径39cm、短径23cm、深さ5cmであった。P 1同様、弥生時代後期～古墳時代初頭の包含層である埴層に由来する細砂質シルトの単層で埋没していた。

底面は平坦で、壁面はP1に比べ緩やかに立ち上がっていた。
出土遺物は検出できなかった。



第24図 ピット

ピット3 (P3) (第24図)

北側部分のC3グリッド、SX2の上端部分でみつかった。SX2とは、重複関係にあり、
P3がSX2覆土上から掘り込まれていた。

径21cm、深さ21cmであった。弥生時代末～古墳時代初頭の包含層である埴層に由来する
細砂質シルトの単層で埋没していた。

底面はすり鉢状で、壁面は急激に立ち上がっていた。

内部より、埴層から流入したと思われる土器片1点が出土したが、図示できるものでは
なかった。

V. 結語

魚崎中町遺跡は市街地の再開発にともなって近年発見された遺跡で、内容は充分明らかになっていない。本來なら、周辺の状況に照らして多少の検討を加えるべきであるが、ここでは、今回の調査で明らかになった点を整理して今後の基礎的情報としたい。

第1・2遺構面については、年代の特定が難しいが、両者の境界に律令制度の畿内周辺地域への波及時期を想定した。第2遺構面の水田跡では、弥生時代後期あるいは古墳時代初頭と考えられる第3遺構面から継続して微地形に沿った土地利用がなされていた。これに対して、第1遺構面の耕作痕では現行地割に沿った土地利用が行なわれていた。

第1遺構面を覆う砂層（IV層）は、今回の調査結果からみて平安時代前半までの間のもとのと考えられるが、連続的に堆積する砂層のうち、クロスラミナがほとんどみられず人の搅乱がある上層（III層）には中世の遺物が混入する。洪水砂は当該地域の調査にとって年代推定の根拠となる重要な層位である。各層位の正確な年代把握は、今後の調査に期待されるところである。

第3遺構面では調査範囲西側へ広がる砂堆上に立地する円形周溝墓と思われる溝跡2条と方形周溝墓1基のほか、これらを取り巻くように、砂堆から後背湿地にいたる緩傾斜に散在する竪穴墓を中心とした土壙群を検出した。これらの遺構から構成される墓域は、砂堆と後背湿地という明瞭な土地区分によって規制されており、深江北町遺跡（山下ほか1988）や郡家遺跡などにみられる遺構分布に共通する内容をもっている。

各円形周溝墓は「連続ラセンタキ」による変形土器を出土するなど、今までの成果（森岡ほか1996など）に照らせば、庄内式期の範疇に位置づけられるものである。また、第3号土壙から得られた複合口縁部壺も、外反する口縁部や凸帯の状況からみて「繩向2～3式」と考えられ、ほぼ同時期から布留式期にかけてのものとみてよいだろう。出土遺物の年代から周溝墓群と土壙群の群構成あるいは形成過程を復元することは難しいが、分布の状況および重複関係からみれば、円形周溝墓群がはじめに形成され、これを取り巻く土壙群が付随しつつ、間隙を埋めるように方形周溝墓が造営されたと考えることができる。

畿内でも同時期の円形周溝墓は少数例であるとされ、深江北町遺跡の11基、郡家遺跡の計4基が集中する東灘周辺は特徴的な地域である。地理的条件からみて東灘地域の沖積地および扇状地には、今後さらに円形周溝墓群あるいは古式の古墳群が発見される可能性がある。その際、大形の円形周溝墓を出土した当遺跡の性格は重要である。

参考文献

- 神戸市教育委員会 1986『昭和58年度 神戸市埋蔵文化財年報』
- 神戸市教育委員会 1987『昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報』
- 神戸市教育委員会 1992『平成元年度 神戸市埋蔵文化財年報』
- 森岡秀人ほか 1996『庄内式土器研究Ⅰ・Ⅱ』
- 山下史郎ほか 1988『深江北町遺跡』兵庫県文化財調査報告 第54号

付編. 自然科学的分析

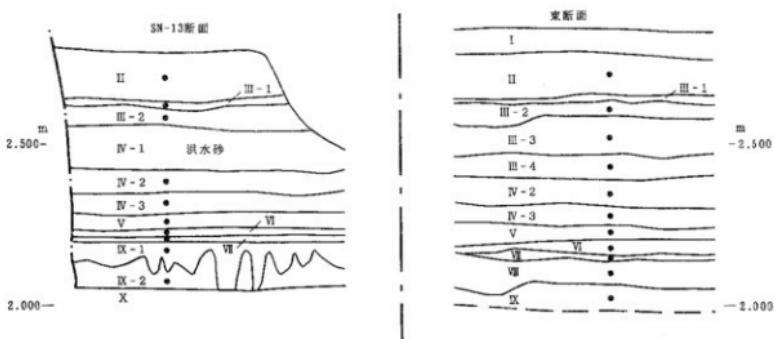
1. 魚崎中町遺跡（3次調査）のプラント・オパール

鈴木 茂（バレオ・ラボ）

イネ科植物は別名珪酸植物とも呼ばれ、根より珪酸を多量に吸収することが知られている。この吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積・形成されたものを植物珪酸体（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体など）といい、植物珪酸体が植物が枯れるなどして土壤中に混入して土粒子となったものをプラント・オパールと呼んでいる。このうち、機動細胞珪酸体については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壤中より検出されるイネのプラント・オパール個数から水田遺構の有無についての検討も行われている（藤原1984）。このような研究成果から、近年プラント・オパール分析を用いて稲作の検討が各地・各遺跡で行われており、神戸市東灘区魚崎中町2丁目に所在する魚崎中町遺跡の3次調査において検出された水田遺構について、その確認作業としてプラント・オパール分析を試みた。

1. 試料と分析方法

試料は、SN-13断面より10点と、東断面より11点の合わせて21点である（第25図）。各試料について簡単に記すと、SN-13断面のII層～IV層はおおむね小レキ混じりの粘土質の砂で、最下部のVI層が砂レキ混じりの粘土層である。また、東断面も、II～IV層についておおむね粘土質の砂である。このうち、両断面ともII～III層が近世の水田、VI～VII層が奈良時代前半の水田層（VII層は床？）と考えられており、東断面では畦畔が確認されている。なお、試料番号は各層位番号と同じとした。これら21試料について、以下のような手順にしたがってプラント・オパール分析を行った。



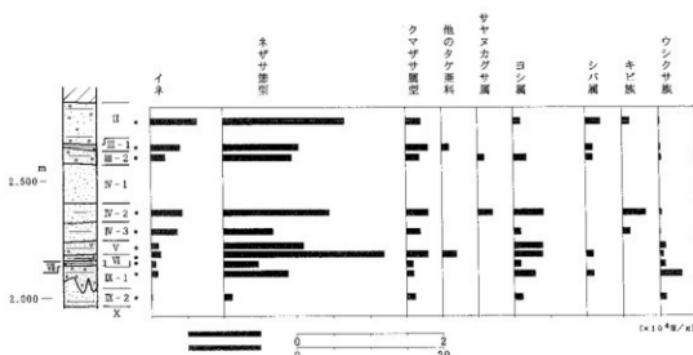
第25図 試料採取地点付近の土層断面図と試料採取層準

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1 g（秤量）をトルビーカーにとり、約0.02 gのガラスピーズ（直径約40 μm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20~30cc加え、脱水機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10 μm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスピーズが300個に達するまで行った。

2. 分析結果 同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスピーズ個数の比率から試料

第3表 試料1 g当りのプラント・オパール個数

試料番号	イヌ (個/g)	ネガサ節属 (個/g)	クマザサ属 (個/g)	他のタケ科属 (個/g)	サヤカサ属 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ属 (個/g)	ウンクサ属 (個/g)	小計 (個/g)
SN-13 II	64,100	16,500	2,100	0	0	1,000	2,100	1,000	1,000	16,500
III-1	40,400	10,400	3,100	1,000	0	0	1,000	0	2,100	13,500
III-2	19,700	9,400	1,900	0	900	1,900	900	0	2,800	10,300
IV-2	43,500	14,500	3,100	0	2,100	4,100	0	3,100	3,100	26,900
IV-3	36,100	6,800	2,900	0	0	1,000	0	1,000	1,000	6,800
V	10,000	11,000	0	0	0	4,000	0	0	8,000	12,000
VI	13,000	22,000	3,000	2,000	0	4,000	1,000	0	5,000	11,000
VII	5,800	4,800	1,000	0	0	1,000	0	0	7,700	8,600
IX-1	8,900	8,900	1,900	0	0	3,000	1,000	0	30,700	10,900
IX-2	1,200	1,200	1,200	0	0	1,200	0	0	8,500	10,900
II 東	47,900	10,900	3,600	900	0	0	900	2,700	4,500	12,700
III-2	48,500	19,600	2,800	900	0	900	1,900	2,800	4,700	8,400
III-3	48,600	18,700	5,600	1,900	0	0	900	1,900	6,500	19,600
III-4	36,800	12,100	0	0	900	900	900	900	3,700	12,100
IV-2	36,900	17,400	2,200	0	1,100	3,300	1,100	2,200	2,200	26,000
IV-3	15,900	10,900	4,000	0	0	7,000	0	1,000	11,900	13,900
V	7,900	10,800	1,000	1,000	0	6,900	0	0	6,900	14,800
VI	11,300	19,800	1,900	0	0	5,700	0	900	13,200	16,600
VII	10,700	11,700	1,000	1,000	0	7,800	1,000	0	11,700	10,700
VIII	3,200	13,800	3,200	1,100	0	3,200	0	0	28,700	18,100
IX	1,000	2,900	1,000	0	0	0	0	0	1,000	3,900



第26図 SN13断面のプラント・オパール分布図

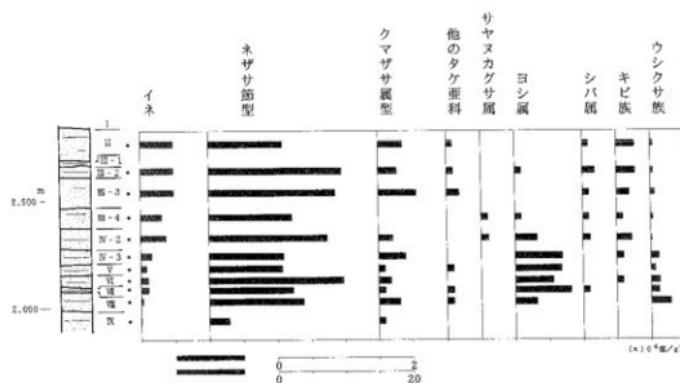
1 g 当りの各プラント・オパール個数を求める（表3）、それらの分布を第26図（SN-13断面）、第27図（東断面）に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料 1 g 当りの検出個数である。

1) SN-13断面 全試料よりイネのプラント・オパールが検出された。その産出傾向をみると、Ⅶ層より上位で10,000個以上検出され、上位に向かって増加しており、洪水層（IV-1層）を挟んで一度減少する（III-2層）が上位に向かって再び急増している。下位層についてみると、ⅣおよびⅧ-1層において5,000個以上検出されており、最下部のⅩ-2層でも若干認められる。

イネ以外では、ネザサ節型やウシクサ族が全試料より検出され、ネザサ節型は上位に向かって増加する傾向がみられる。また、ウシクサ族はⅩ-1層において突出的に多く検出されている。ヨシ属は洪水層より下位で多く検出される傾向がみられる。クマザサ属型も多くの試料より検出されているが、個数としては2,000個前後と少ない。その他、サヤヌカグサ属、シバ属、キビ族などが若干検出されている。

2) 東断面 やはり全試料よりイネのプラント・オパールが検出されており、上部に向かい増加する傾向が認められる。検出個数としては、上位では30,000個以上と多く、Ⅷ-IV-3層でも10,000個前後であるが、最下部のⅩ層は1,000個と少ない。

イネ以外ではネザサ節型が全試料より得られており、最下部を除いて10,000~20,000個と大きな増減はなく、比較的安定して検出されている。ウシクサ族も全試料より検出され、Ⅹ層においてやや突出した産出を示すなど、下位試料においてやや多く検出されている。ヨシ属も下部で多く検出されており、これはSN-13断面と同様の傾向である。反対に、クマザサ属型は上部で多くなる傾向がみられるが、個数的には少なく、キビ族も同様である。その他、サヤヌカグサ属、シバ属などが若干検出されている。



3. 稲作について

上記したように、全試料よりイネのプラント・オパールが検出された。検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、福岡市の板付北遺跡では、イネのプラント・オパールが試料 1 g 当り 5,000 個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原 1984）。こうしたことから、稲作の検証としてこの 5,000 個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。魚崎中町遺跡における奈良時代前半の水田層Ⅵ・Ⅶ 層についてみると、SN-13断面のⅦ 層で 5,800 個の他はいずれも 10,000 個以上と多く検出され、上記の検証例からすると、稲作が行われていた可能性は高いと判断されよう。また、近世の水田層、Ⅱ～Ⅲ-2 層においては 40,000 個前後と非常に多く検出されている。このように、奈良時代前半および近世の水田層において、イネのプラント・オパールが多く検出され、水田稲作を支持する結果が得られた。なお、さらに下位のⅣ 層からもイネのプラント・オパールが検出されているが、SN-13断面のⅣ-1 層を除いて検出個数は少なく、水田遺構も検出されていないことなどから、Ⅳ 層における稲作の可能性は低いと思われる。こうしたことが起こる要因として、耕作による人為的搅乱、あるいはミミズなどの生物的搅乱により上位層（Ⅵ 層・Ⅶ 层）から混入したのではないかと推測される。

4. 遺跡周辺のイネ科植物

ネザサ節型が比較的多く検出されており、ネザサ節型のササ類（ゴキダケ、ケネザサ（ミヤコネザサ）など）が遺跡周辺に多く生育していたと推測される。また、クマザサ属型のササ類（チシマザサ、チマキザサ、ミヤコザサなど）については、主に林下での生育が予想され、試料採取地点周辺に存在していたであろう森林の下草的存在で分布を広げていたと推測される。

ヨシを代表とするヨシ属は下位層で多く検出される傾向がみられ、水田稲作地の広がりとともに、その周辺の水域や湿地などに多く生育するようになったと推測される。また、ススキ、チガヤ、オギなどが含まれるウシクサ族もヨシ属と同様の産出傾向を示している。このうち、オギはヨシ同様水辺に群生する植物で、これらが水田周辺に多くみられるようになったのではないかと思われる。しかしながら、現時点では形態からオギと同定することはできず、オギについては今後の課題である。その他、畦などにはシバ属がみられたであろう。

なお、キビ族については、その形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種によるものか、エノコログサ、スズメノヒエ、タイヌヒエなどの雑草類によるものかについて現時点においては分類できず不明である。

引用文献

- 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科植物の硅酸体標本と定量分析法—」『考古学と自然科学』 9、p.15-29.
- 藤原宏志 1984 「プラント・オパール分析法とその応用—先史時代の水田址探査—」『考古学ジャーナル』 227、p.2-7.
- 藤原宏志・佐々木彰 1978 「プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）—イネ（*Oryza*）属植物における機動細胞珪酸体の形狀—」『考古学と自然科学』 11、p.9-20.

2. プラント・オパール分析の成果について

分析の目的

今回の調査で検出した水田跡（Ⅵ層水田）では、明瞭な水田面および畔咲を捉えることができなかった。水田土壌として認定したⅡ層からⅣ層にいたる層位は、いずれも洪水の影響を強く受けており、表面水の鉛直透過に際して相当下層にいたるまで土壤化が起こる可能性が考えられた。また、特にⅥ層は洪水砂そのものを利用して水田耕作土としたものと推定されたため、Ⅳ層の高まりとして捉えられた畔咲基部および疑似畔咲が、上層の土壤化によって形成されたもので、本来的な水田層でない可能性があった。この点を検証するため、プラント・オパールによる分析を依頼した。

選択試料

分析は、問題となるⅥ層水田を検出した範囲のうち、もっとも明瞭に水田土壌および畔咲が確認できたG 8グリッド東側調査範囲境界断面とD 5グリッド南側調査範囲境界断面からサンプリングした土壤試料21点について行った。

以下に、今回の調査と分析によって明らかになった事実と今後の課題を整理して分析結果に対するコメントとしたい。

結果と分析

基本層序から予想した水田層には、いずれも著しい量の福および水田雜草のプラント・オパールが検出されており、今回の調査の検証材料となるものとなった。

Ⅵ層水田は、床土の酸化状態などからみて、長期間の営農によるものであるとは考えにくく、生産性に關しても近世以後の水田土壤（Ⅱ・Ⅲ層）と比較すると相対的に低いと判断できる。

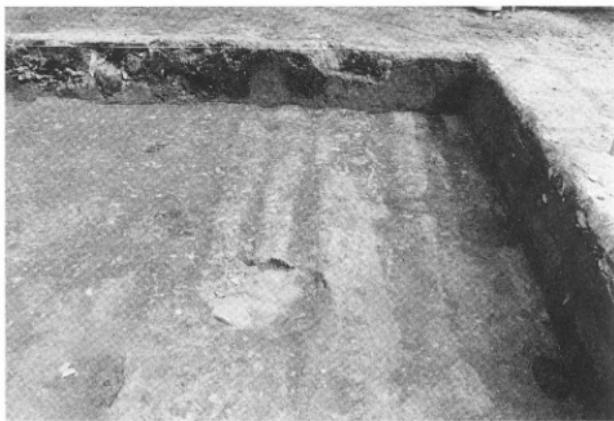
また、堆積環境においてすべての層に強く影響を与えている数回にわたる洪水が、各層位におけるプラント・オパールの遺存状態にさほど大きな影響を与えなかつたことは注目できる。

これらのことから、Ⅵ層水田が形成された時期を、出土遺物から古墳時代後期に求めるるとすると、今回の発掘調査地点の砂堆上および後背湿地周縁部では、古墳時代をさらに遡る水田耕作が行われていなかつたことになる。

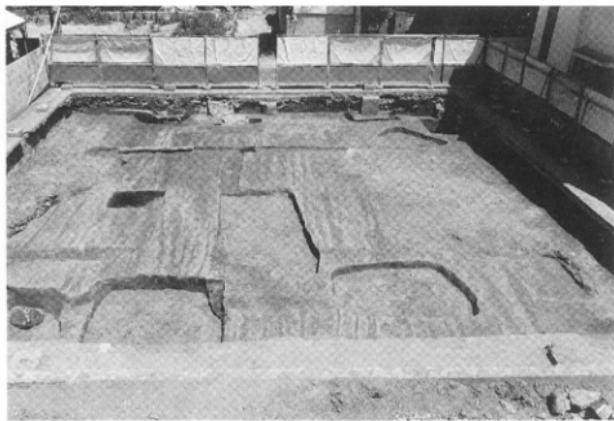
今後の調査では、洪水砂層中の古墳時代以降の水田跡について検討する必要がでてきたといえるだろう。特に洪水直後に洪水砂を利用して耕作土を復旧する場合や、砂堆上に水田を經營する場合などは、きわめて薄く不明瞭な水田層が認められるに過ぎず、注意が必要であろう。また、土壤化の理論的要件からみて、これらの土地条件下に営まれる水田については、自然科学的接近法からの証左が重要である。



先行調査範囲(第2遺構面)



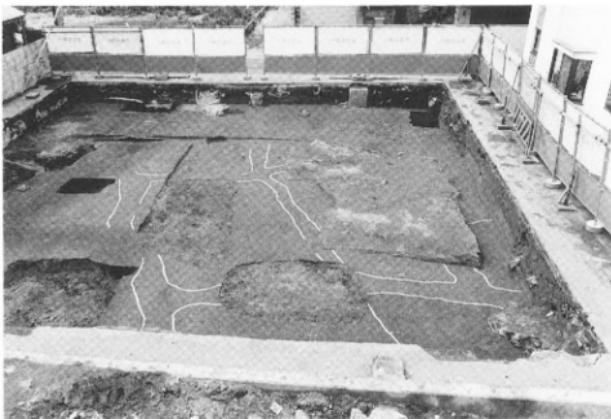
南側部分耕作痕



北側部分耕作痕



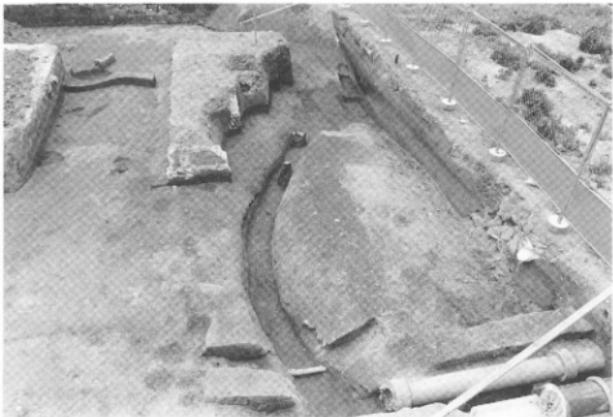
南側部分水田跡



北側部分水田跡



調査風景



南側第3遺構面



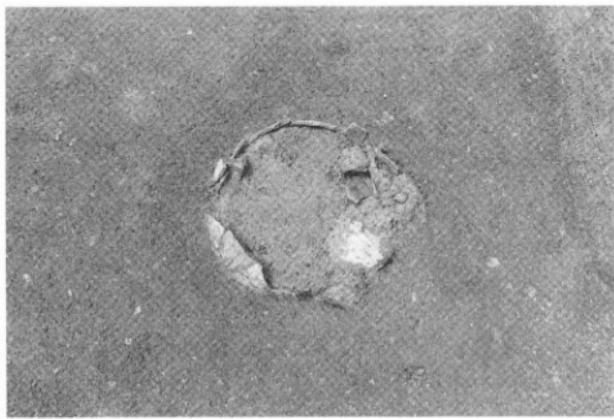
北側第3遺構面



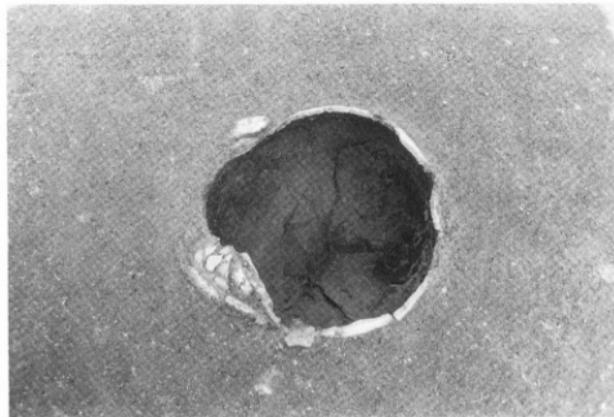
六甲山と遺跡



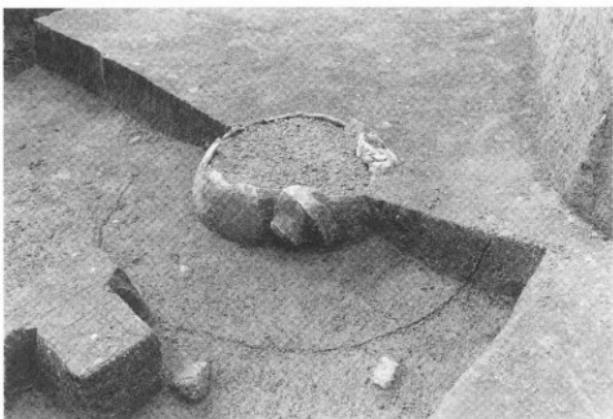
第 2 号土坑



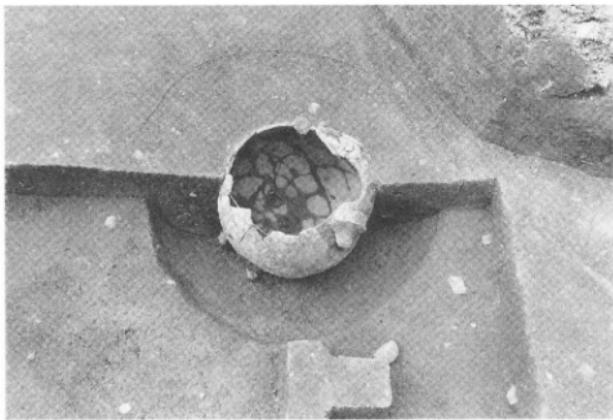
第 3 号土壤確認状況



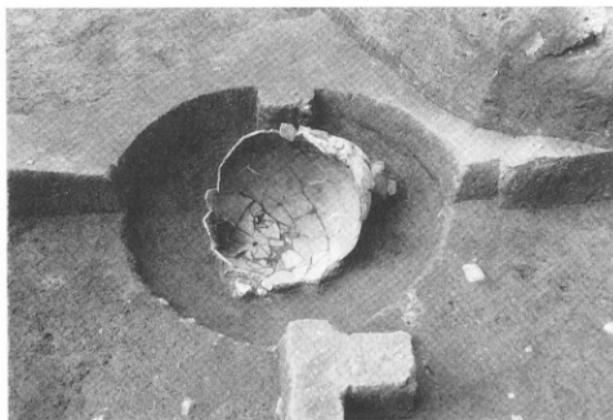
第 3 号土壤内部



第3号土壤掘り方確認状況



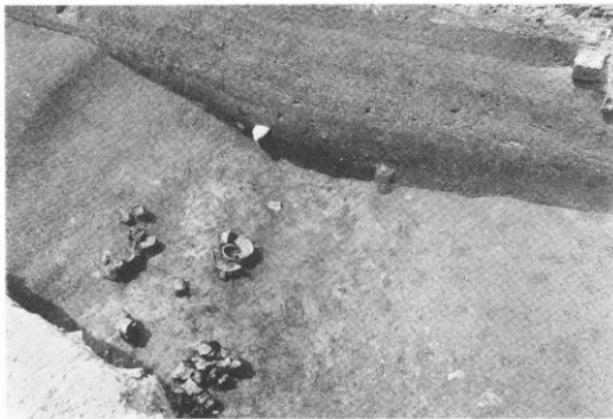
第3号土壤外部



第3号土壤完掘状況



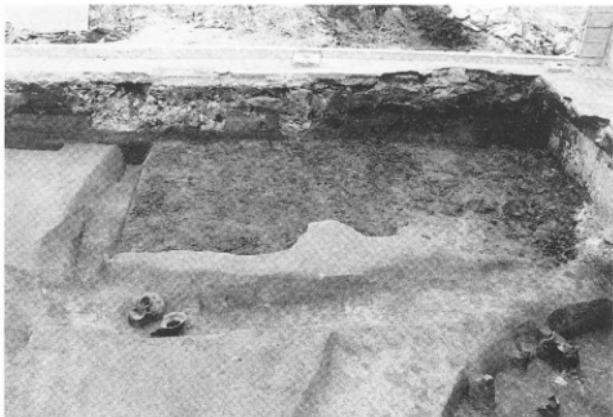
第1号周溝墓



第1号周溝墓遺物出土状況



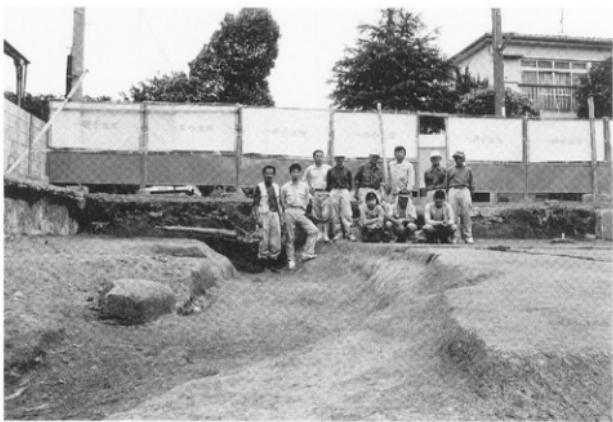
第2号周溝墓



第3号周溝墓



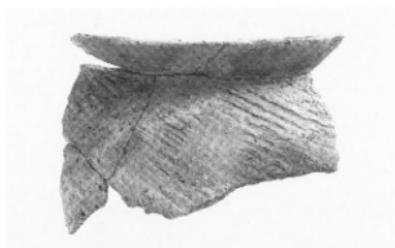
第3号周溝墓遺物出土状況



発掘調査参加者



SX 1-1



SX 1-3



SK 2-2



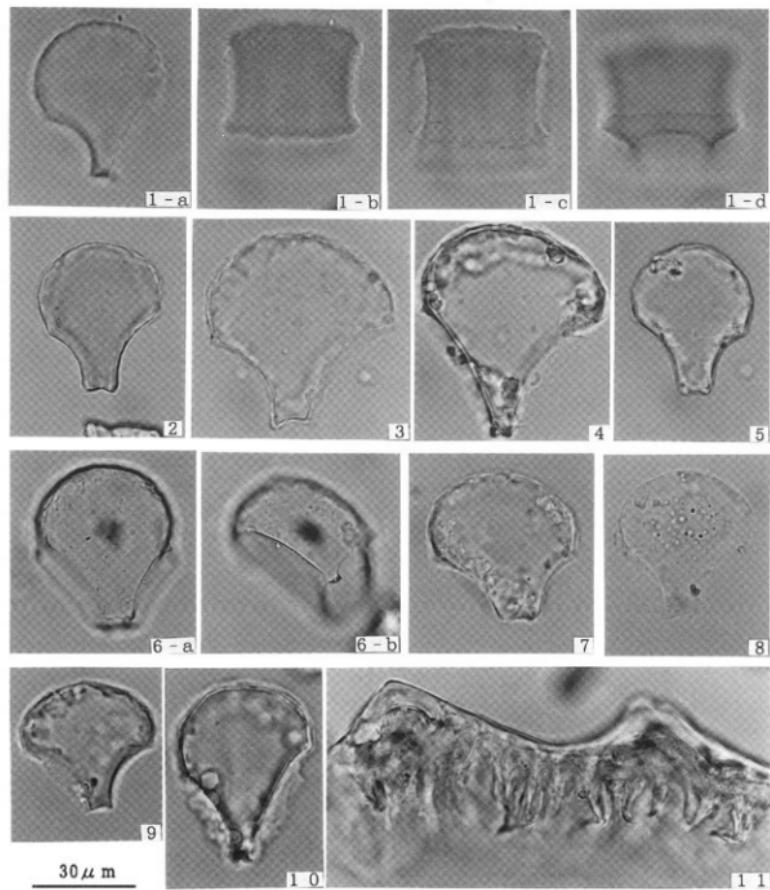
SK 2-3



SK 3-1



水田跡 6



1~10:イネ (1-a, 2~5, 6-a, 7~10:断面、

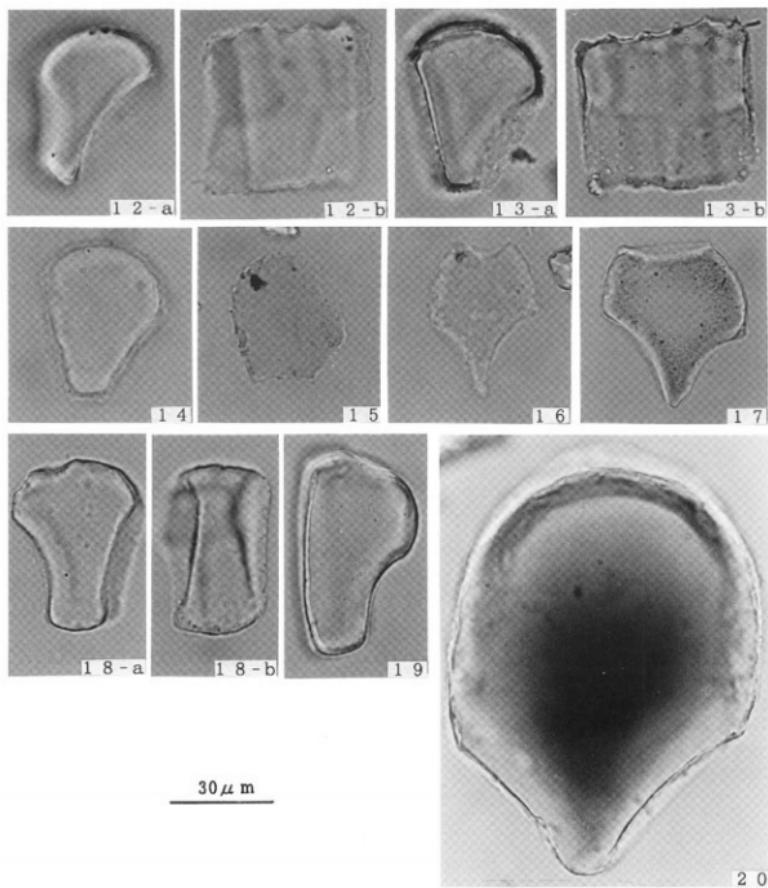
1-b:側面、1-c, 6-b:裏面部、1-d:表面)

1:東, II, 2:SN-13, III-1, 3:SN-13, IV-2, 4:SN-13, VI,

5:SN-13, IX-1, 6:東, III-4, 7:東, IV-2, 8:東, VI

9:東, VII, 10:東, VII

11:イネ穎部破片? SN-13, III-2



12~14：ネザサ節型

(12-a, 13-a, 14: 断面、12-b, 13-b: 側面)

15 : クマザサ属型 (断面) 東, III-2

16, 17 : シバ属 (断面) 16: SN-13, II, 17: 東, III-4

18, 19 : ウシクサ族 (18-a, 19: 断面、18-b: 側面)

18- : 東, IV-3, 19: 東, VII

20 : ヨシ属 (断面) 東, IV-3

報告書抄録

ふりがな	こうべしひがしなだくうおざきなかましいせき (だいさんじちょうさ)
書名	神戸市東灘区魚崎中町遺跡（第3次調査）
副書名	樺原氏所有共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	岩田明広
編集機関	神戸市教育委員会
所在地	〒650 兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号
発行年月日	西暦1997年3月31日

所取遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東經 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うおざきなかま 魚崎中町 いわき 遺跡	ひょうごけん 兵庫県 こうべし 神戸市 ひがしなだくうおざき 東灘区魚崎 なかまちにちゅうの 中町2丁目 ごりゃくろくじゅうな 5 6 7 のいち・じ - 1. 2	28110		34° 42' 42"	135° 16' 41"	先行調査 19960423～ 19960427 本調査 19960513～ 19960628	先行調査 133 本調査 391	震災復興 事業に伴 う事前調 査

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
魚崎中町 遺跡 (第3次調査)	墓跡	古墳時代初頭	円形周溝墓2基	土師器	
			方形周溝墓1基		
		奈良時代	壇棺2基		
	水田跡	平安時代	水田跡17筆	土師器	
		耕作痕		須恵器・金属製品	

神戸市東灘区

魚崎中町遺跡（第3次調査）

平成9年3月31日印刷

平成9年3月31日発行

発 行 神戸市教育委員会

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

TEL 078-322-5798

印 刷 水山産業株式会社

神戸市長田区二番町3丁目4番1号

TEL 078-576-3164

広報印刷物登録・平成8年度 第306号 (A-6類)



この冊子は、再生紙を使用しています。